



# 密約



segakiyui

『ヴラン！』  
 眠りの底の暗闇から、遠い呼び声がよみがえってくる。  
 『ヴラン！ ヴラーン！』  
 『おとおさあん！ おかあさあん！』  
 幼くて頼りない叫びが、深い宇宙を、砕け散る星々の間をすりぬけて、何とか相手にたどりつこうとする。  
 だが、その声は届かない。  
 決して届かないことを俺は知っている。  
 (ああ、またあの夢だ)  
 俺の胸を切り裂きながら、何度も繰り返す悪夢がにじみだしてくる。

「アラームが全部鳴っている！」  
 「助けてっ、だれかっ」  
 「ばかな、こんなばかな！」  
 「救急信号は送ったのか！」  
 「ポッドで逃げろっ」  
 悲鳴と怒号が真っ暗になった宇宙船の中に満ちあふれている。  
 この宇宙船には、事前の説明では、十分な緊急設備と訓練された乗務員が乗っている、はずだった。  
 そしてまた、いざという時にも適切な避難誘導と救助により、乗客の安全は確実かつ迅速に保証されるはず、だった。  
 ところが、いざというときになって見つかったのは、注意事項を羅列したプレートと安っぽい宇宙服が十数着。もちろん乗客数の宇宙服はない。  
 脱出ポッドも圧倒的に数が足りず、こともあろうに、客を放って我先に宇宙船から逃げ出そうとした乗務員が使ってしまって、残りがわずかになっている。  
 パニックを起こすなという方が無理だった。  
 あちこちで小刻みに、次第に程度と頻度を増して、爆発音が響いていた。  
 船はそのたびに、不気味にきしみ揺れて、宇宙旅行に慣れていないものにも、この船がそれほど長くもたないということがわかりつつあった。  
 「ヴラン！ 行けっ！」  
 俺がポッドに押し込まれた次の瞬間だった。  
 これまで以上に激しく船が震えたかと思うと、致命的な爆発が起こった。  
 父親が目の前で吹き飛ぶ。ちりちりに、見たくもないほどちりちりになって。焼けこげて変色し固まりかけた体の破片が、濡れた異様な音をたてて、ポッドに叩きつけられ、外壁にへばりつく。  
 母親が裂かれたような悲鳴を上げた。  
 無理もない。ただ一人の『密約』の相手だ。  
 失ってしまったが最後、母親の体はエネルギーを補充しきれなくなって、数時間以内に死がやってくる。意識を持ったまま、どろどろに溶けていく恐ろしい死が。  
 「行きなさい、ヴラン」  
 母親がポッドを閉めた。泣き叫んでハッチにすがりつき、こじ開けようとする俺に首を振り、ガラスを隔てて笑って見せる。  
 「ここからなら『地球』に行ける。何とかして生きるのよ、がんばって、ヴラン。母さんはもうだめ」  
 何かが破裂するような音と衝撃が襲って、俺はポッドの床に跳ね飛ばされた。見る見る経験したことの無い重圧が体中をポッド内壁に押しつける。ポッドが射出されたのだ。  
 落ちる、落ちる、落ちていく。  
 青く輝く水の星に。  
 あの星に同化するんだと泣きながら思った。  
 最悪の夢。

ずっと昔のことなのに、すべては終わってしまったこと、ただの夢だとわかっているのに抜け出せない。  
 父親は何度も吹き飛ばされ、母親は何度もさよならを言う。  
 ただの観光旅行だったのに。  
 助けてくれ。  
 苦しくてつらい。  
 俺は何もできなかった。  
 一人で寒い。  
 どこにも行くところがない。  
 誰か、誰か。  
 俺を温めてくれ。  
 なんて夢だ。  
 なんて現実だ。  
 なんて...

「はっ」  
 激しく息を吐いて俺は跳ね起きた。夢の余韻でまだ全身を震わせながら部屋を見回す。  
 薄いカーテンの向こうから微かな光が差し込んできて、六畳間を照らし出していた。  
 小さなカラーボックスとオーディオセット、テーブルに飲み残したウーロン茶のペットボトルとコンビニ弁当のゴミ、部屋の隅には脱ぎ捨てたトレーナーにジーパン、乱雑に積まれた大学の本やノート。  
 壁に立てかけた鏡から、ベッドの上で体を堅く強ばらせて凍りついている俺がこちらを見返してくる。  
 ベッドをはみ出しそうな長さの手足、ランニング一枚の上半身はほどよく筋肉がついている。乱れた茶色の髪は脱色しているわけじゃない、猫っ毛という奴でふわふわして細い。二重でまつげの濃い大きな目は驚くほど大きく見開かれていて、細めの鼻梁にはいざさかアンバランスに見える。骨張ったがっしりした手で口元を覆っているから今は見えないが、唇がぷくっとしていて女性的な顔立ち、いわゆる『美少年』タイプ、らしい。も

つとも体は大きいから、かわいらしい、という扱いはもうされようがないが。

これが『近江潤』。

十九歳の大学生で、この春二年に進級したばかり、安いがまあまあ小ざれいなアパートに一人住まいをしている。

けれど、本当の俺の姿は、『地球』ではたぶん『コバルト・ブルーのスライム』が一番近い。

不定形液体型宇宙人とでもいうべきか。

俺と家族は、故郷の大型観光宇宙船『シュダ・アン・アル・バ』に乗り込み、知的生命体の生存が確認されている惑星のすぐ近くの衛星にきていた。

この衛星には、既に『地球』の生命体がたどりついている。いつ『地球』にいる生命体に見つかるかわからないというスリリングな旅を楽しんでいた。

事故が起こったのは、予定の航行を終えて帰途につき、地球を周回したときだった。

『地球』の外を取り巻いている、本来なら宇宙法違反の多くの不法浮遊物の一つが、突然宇宙船に接触し、航行機能を破壊したのだ。

宇宙船は爆発を繰り返して飛散し、わずかな脱出ポッドで宇宙空間に逃れた仲間もどれほどが助かったのかはわからない。

『地球』は辺境地区にあり、宇宙法の及ばない無法地帯だと聞いていたので、詳しい捜索がされる可能性も少なかった。

俺のポッドは幸いにも『地球』の山奥に落ち、そのときから、俺は『地球』人にならざるを得なかった。

「はあ...」

俺は深く息をついて、頭を立てた膝の間に落とした。

「いつまで...見るんだろう、この夢」

体がべっとりと汗で濡れていて、その汗に自分の体がゆっくり溶け出していくようで気持ち悪い。このアパートにはシャワーなんて便利なものはないから、被っていたタオルケットでこそごとと体をぬぐう。

もう一度周囲を見回すと、またしみじみとため息が出た。

『地球』で暮らして五年にもなるのに、夢だけは五年前から変わらない。

むしろ、成長するにつれて、あのとき何もできなかった自分へのいらだたしさが募ってくる。

無理なことだったのだ、と頭ではわかっているつもりだった。あんなことが起きるなんて、誰も思ってやしなかった。あんな状況で、十分に後悔しないようにやりぬけるものなんて、まずいない。ましてや、俺はあのとき、『成人』もしていないほんの子どもで...

そのとたん、俺はどきりとして顔を上げた。

何か、胸の内から、体の底の方から、さわさわと波打ってくるような流れを感じる。肌に触れているタオルケットが突然妙になまめかしいような、まとわりついてくるようなものに変った気がする。呼吸が乱れる。このまま何かにすがりついて、溶け込み、崩れ落ちてしまいそうだ。

俺は、もう一度、鏡の方を見た。

「まさか...」

薄明かりの中ではあやふやだからと、カーテンを開け放ち、鏡をまじまじとのぞき込む。間違いない。

瞳の奥に、何かきらきらと潤むように光っているものがある。

春の光のせいだけではなくて、とらえようとすると消えていく幻のようだが、それらがときどき金の筋のようなものになってうごめくように見える。

「『恋愛濃度』だ」

つぶやくと、まるでそれに答えるようにずきりと体の奥から跳ね上がってくるような感触があった。

「大人、になったんだ」

大人。

父親や母親のように『密約』の相手と生死をともにするような。

(もし、父さん達が生きていたら、喜んでくれたらどうか)

その思いは、散らぼってしまった父親や宇宙船と一緒に炎の塊に飲み込まれた母親に重なって、切ないようなくやしいよううねりになって、体の内側を駆けた。

「用心しろよ」

鏡の中の自分に言い聞かせる。

(こんなところで『密約者』なんて冗談じゃない)

だからと言って、もう故郷に帰れるわけでもなかったが。

俺は頭を振って、もう一度、鏡の中の『近江潤』にいい聞かせた。

「取り返しのつかないことにならないように、な」

早起きしたから電車もいつもより混んでいなくて、俺はほっとした。窓から入って来る風が甘くまとわりつく。駅の周囲に植えられた花々の、舞うように動く花びらが、俺をその花芯へ誘い込むように見える。

『恋愛濃度』のときは、ささいなことでも気持ちの揺れがひどくなる。特に、『近江潤』は男性体だから、女性体との『接触』は気をつけるにこしたことはない。もし、万が一、後々後悔するような相手と『接触』したら最後、それは俺の運命をとんでもない方向にねじ曲げてしまう。

『恋愛濃度』というのは、故郷では『成人』の印にあたる。自分の唯一の相手、『密約』の相手を選び、一生涯を共にするという大仕事にかかるときだ。

簡単にいえば、繁殖期、次世代を生み出す時期ともいえる。なるべく誰の体にも触れないように、電車のドアから離れた小さなへこみに体を潜ませて外を見ながら、幼いころからあちこちで聞かされた『密約』の悲喜劇を思い出すともなく思い出していた。

『密約』は、『恋愛濃度』中の個体が激しい感情的な衝撃をともなった『接触』によって行われる、らしい。

もっとも、『恋愛濃度』中には、どんな『接触』もすぐさま激しい衝撃をもたらすぐらいに過敏になっているのが常だから、気まぐれとか通りすぎりに『密約』してしまう、なんてことさえありうる。

ところが、そうなったときに、お互いに必要としあっているのならよし、もし、片方が『密約』を重視しない個体だったり、まもなく死ぬ運命にある個体だったりすると、ひどいことになる。

なぜなら、『密約』をした個体同士は、以後、相手の生み出すエネルギーだけで生きていくことになるからだ。

しかも、『密約』の関係は基本的には個体の意志では変えられない、と聞かされている。俺達は『成人』に達すると『恋愛濃度』になって、『密約』をし、生涯その相手と生きていく。

もちろん、死ぬ時もそうだ。片方が死ねば、もう片方は生きてはいられない。

『密約』はその相手以外のすべての個体とつながる術を断ち切る封印、と言えるかもしれない。

故郷ならまだしも、俺は電車の中を見回した。笑いあう強烈なエネルギーの人間達。そして、その中の『女』と呼ばれる生命体。赤い唇や白く伸びた脚、これみよがしに柔らかな布一枚で遮られた胸元や体の線は、『近江潤』の感覚をじりじりと焦がし始めつつある。

けれど、それに巻き込まれたが最後、俺には致命傷になる。

『地球』の、特に『人間』という知的生命体は他の生物に全く優しくない。自分達の中でさえ、少しでも形や色や行動が違うと、群れから突き放し叩き出し、痛めつけるものだ。『地球』の五年間で、俺は十二分にそういうことについて学んでいた。

そんな生物と一生涯を共にするなんて、冗談じゃない。ましてや、そんな相手に命の鍵を握られるなんて、ごめんだ。

「ねえねえ、そこのあの人、ちょっと、さあ」

「こっち見てるよ、こっち」

斜め前にいた花柄のミニワンピースの娘と淡い色のモヘア上下の二人連れが、つつきあって俺を見た。

「ちょっといいかも」

「声かけてみる？」

「一人って？ それとも」

その後は何か淫らな含み笑いになって、顔を寄せ合った。声は聞こえなくなったが、ちらちらと動く視線がこちらを舐め回し、濡れたようなリップをべっとり塗りつけた唇の奥に舌が覗いた。露骨に体を品定めされていると気づいて不快になる。

俺は無意識に組んで体を抱き締めていた腕を解き、そこから離れた。

「あん、いっちゃんよ」

「つけようか」

含み笑いが耳に貼りついてきそう。その感覚に耐えながらも、ふと気を緩めると、そちらに否も応もなく吸い寄せられ飲み込まれていきそうな気がして、俺は必死にその感覚を振り切った。

駅についたのをいいことに、大学には一つ二つ遠いけれど、電車を降りてしまう。足早に改札を抜け、大学の方へ大まかに歩き出す。

春の日差しは街路樹の透き間からこぼれて、ちらちらと歩道に踊っていた。木漏れ日はどこか清々しく、体にたまったもやもやした気配を少しずつ流してくれるようだ。

ようやく少し気が緩んで、吐息をつく。

「あ、あつ、ごめん」

ふいに覚えのある声ですぐ側の公園から響いて、俺は足を止めた。

小さな公園なのに、真ん中に花の形をした石から水を吹き上げる噴水がある。その回りは円形の池になっていて、コンクリートのベンチが丸く取り囲んでいるようだ。

そこに一人の女の子がいる。

ショートカットのさらさらの髪を日の光に輝かせて、白いTシャツにスリムジーンズ、興奮して上気した頬はほころんださくら草の色だ。両手を噴水に差し伸べて何事か唱えるように目を閉じると、まるやかな曲線を描いた頬にも陽光が躍った。すべすべした両腕が、水の気配を囲うように、ゆっくりと柔らかな動きで何度も丸く形を作る。

そう、彼女は繰り返し、繰り返し、はね散る水を抱き締めている。

その足元には、まかれたパンくずを忙しそうについばんでいる小鳥の姿が点々としていた。さっきの『ごめん』は、どうやらその小鳥達に向けられたものらしい。彼女の手が噴水の水を抱こうとするたびに跳ね上げるしぶきに、慌てたように鳥達が逃げ惑っている。

女の子と呼んだけれど、本当はそんなに幼くない。華奢な体つきや、少年じみた表情がそう思わせるだけで、本当は大学三年、名前を秋野ひかり、という。

(きれいだ)

ふいに、胸苦しくなるような思いで自分が秋野さんに見惚れていると気がついて、俺はあわてた。

(何考えてる、見慣れてるはずだろ)  
相手がすぐに秋野さんだと気がついたのも、友達の村西と一緒に入っている学内サークル『異常現象研究部』で彼女を見ていたからだ。  
俺が人付き合いが悪すぎると気にした村西が引っ張っていったのが『異常現象研究部』、そのころあちこちの勧誘合戦にうんざりしていた俺は、幽霊部員がほとんどだということばに引かれて入部したのだ。  
(でも、何してるんだ？ こんなところで)  
人気のない朝の公園の噴水で、まさか、いい年をした女性が水遊びでもないだろう。  
俺のことばが聞こえたみたいに、秋野さんはふいに動きを止めて、目を開いた。くるりとためらいもせずに振り返り、俺の方をまっすぐ見る。  
避ける暇などなかった。  
こぼれ落ちそうに見張った目が笑みをたたえて細くなる。噴水の水が飛んだのだろうか、ふんわりと笑った唇が濡れて、淡く柔らかく日の光を受け止めて輝いている。  
(水が、彼女の唇に、触れた)  
何か体が貫いて、俺は身を翻した。急いで、大学の方へ歩き出し、やがて逃げるように駆け始める。  
唐突に自分の体を駆け抜けた衝撃。  
俺もあの唇がほしい、と思ったのだ。

「おうい、近江」  
聞き慣れた声に呼び止められて振り返った。  
予定の講義は終わった。不安定なときには、学内にいるのがつらい。さっさと家に帰ってしまおうと思っていた矢先のことだ。  
「帰るのか？」  
村西がハスキーというよりはガラガラした声で笑っていた。  
「ああ」  
「どこかのきれなおねーさんとお出掛け、って気にはならねえのか？」  
ひょいと片手に数枚のカードを差し出して見せる。俺はうんざりした。  
「やるよ」  
「やるよって、オレがもらっても仕方ねえだろ？ 全部『近江潤』あてだぞ」  
受け取って、村西の手前、目を通して見る。  
メールアドレスつきのテレフォンカード、写真つきの薄い手紙、どこかの店のチケットにハートマークつきのメッセージ、コンサートや映画の券とメッセージカード。  
俺は携帯電話をもっていない。確かに連絡はこういう方法でしかとれないだろう。  
「この中に、お前の気に入った相手っているのか？」  
俺は村西の笑っている気のいい目を見返して尋ねた。  
「いねえけど、いても、本命がおまえじゃ勝ち目ってものが……あーあ」  
俺が名前を確認もせずにゴミ箱に放り込んだのを、相手はあきれ顔で見た。  
「もったいねえな」  
「興味ない」  
「興味ないっても…もったいねえだろ、カード代。売ればいくらになるぜ」  
そっち側のもったいないか、と俺は思わず吹き出した。  
「だけど、こっちは断れねえな」  
懲りたふうもなく、村西はもう一枚カードを取り出した。それも見るまでもない、ゴミ箱へ捨てようと手を伸ばした俺に、違う違うと首を振って文面を読み上げた。  
「秋野ひかりからだ。部室に来てくれて」  
「秋野さん？」  
朝の噴水の光景が通り、胸の鼓動がいきなり予想もしていなかった激しさに跳ね上がった。俺はうろたえた。  
「何だか、話があるんだってさ、朝のことで」  
「朝のこと」  
体が見る見る熱くなる。濡れて光っていた桜色の唇が視界に重なって、無意識に唾を飲み込んだ。声が不安定に震えるのを堪える。  
「何だ？ おい。秋野が趣味だったのか？」  
村西がぼかんと口を開けて俺を見る。  
「そんなんじゃない」  
俺は慌てて否定した。  
（そうとも、そんなはずはない）  
『恋愛濃度』の『接触』は、身体的なものはずだ。見ただけでこんな状態になるなんて、聞いていない。けれど、体は勝手にあやしい揺れを生み出し始めている。それを何とかごまかそうとして、俺は向きを変えた。  
「わかった、いってくる」  
「相手は秋野だぞ、襲われんなよ」  
後ろから村西が投げってきた冗談にさえ、一瞬、それでもいい、なんて思ってしまった、俺はくらくらした。  
こんな状態のときに気になっている相手に会うなんて自殺行為だ。ここは故郷じゃないし、俺は人間じゃないんだぞ、バカなことするんじゃない。そう何度も繰り返して向きを変えようとしたけど、気がつけば吸い込まれるように部室に入っていた。  
「あ、そこ！」  
「あ、そこ！」  
秋野さんの警告は遅かった。俺は、入り口近くの棚から突き出ていた板に思い切り頭をぶつけていた。  
「あつつっっ」  
額を押さえてうめいていると、  
「あいかわらず、でっかいな」  
秋野さんが笑いながら、座っていた机から立ち上がって、様子を見に来てくれた。卵形の顔にぼつちりと赤い唇がまるで磁石のように視線を引く。とっさに目を逸らせて答える。  
「こんなところに妙なもの置いとかないで下さいよ」  
「そこにあるのにぶつかるの、近江ぐらいだよ」  
楽しそうにくすくす笑っている。  
「百九十はある？」  
秋野さんは気づいたふうもなく、俺をひょいとのぞき込み、白くて細い指で俺の額のぶつけたあたりに触れた。じり、と指先で焼き印が押されたような気がして俺は体を引いた。  
（『密約』？ いや、違う）  
初めてのこののはずなのに、そう、感じた。感じた瞬間に、舌打ちするような残念さが滲みかけて、慌てて思考に集中する。  
（無視しようとするから、逆に気になるのか。それとも、こいつの体が反応しやすいとか）  
『地球人』で『恋愛濃度』を体験したような仲間なんていないだろうし、と考えて、自分が未曾有の事態というやつに遭遇していると気づく。  
（ひょっとして、『密約』の経験自体も違うかもしれない）  
意外に、そうだ、『地球』でも発情とか言われている状況ぐらいですむのかもしれない。（それなら、秋野さん相手なら、ちょっと考えてもいいかも）  
そう考えると少し気が楽になって、秋野さんに目を戻した。  
「百九十二、あります」  
「あ、あ、百六十だよ」  
唇をとがらせる、その仕草が何だかとっても可愛いと思えて、俺はまぜっかえした。  
「文句あるんですか？」  
「文句つけたら、縮んでくれる？」

「……縮みませんで」  
くすくす笑う秋野さんに舞い上がっていた気持ちが一気に冷えた。正体を知っているのかと思ってひやりとしたせいで。  
(そんなことがあるはずはない)  
いくら秋野さんが『異常現象』に興味があるといっても、『地球』に既に宇宙人がいて、しかもそいつが目の前にのっそり立っているなんて、さすがに思いつきはしないだろう。  
「それより、何ですか、用って」  
「んー？」  
秋野さんは俺をからかって満足したのか、机に戻って広げていたノートを見ている。それきり、俺のことは忘れてしまったかのようにページをめくる。  
「朝のこと、って言ったんでしょ、村西に？」  
あんまりそっけなくふるまうんで、つい、側に寄って話しかけると、秋野さんは唐突に顔を上げた。さっきよりずっと距離が近くなったことに気づいたが、もう身を引くことさえできなくなっていた。何だか、秋野さんの磁力にからめとられたみたいだ。  
「朝、どうして逃げたの？」  
秋野さんはいたずらっぽく目で尋ねてきた。  
「逃げた、なんて」  
図星をさされて一瞬、ことばに詰まった。  
こういうところがこの人は妙に鋭くて困る。  
「秋野さんこそ、何をしてたんですか」  
ようやく切り返すと、  
「うん」  
秋野さんはにっこり笑った。邪気のない、澄み切った笑顔だ。  
「水と話せないかな、と思ってさ」  
さすがにびく、と無意識に体が固まった。やがて体の中心に炎を投げ込まれたような気がしてきた。  
ゆらめき、広がる、炎の色は青だ。青と金の『恋愛濃度』の色。  
「SF映画じゃあ、液体型の生命ってあるじゃないか？ 小説で水みたいな生命体が書かれている。だからひょっとすると、この地球上にある水の中には、そういう奴がいるのかなって思ってた。けど」  
くすくすと秋野さんは笑った。  
「あの公園の噴水の水はそうじゃなかったみたいだ。それとも、あたしと気が合わなかったのかもしれないな」  
揺らめく感覚とは別の衝撃が俺を襲った。  
(液体型の、宇宙人と、話そうとしたって?)  
秋野さんが今やっているのはまさにそれだといったら、どんな顔をするだろう。  
そう思った次の瞬間だった。  
「近江？」  
「は？ あ、んっ！」  
自分がまずい位置にいることを忘れていたわけじゃなかったが、液体型宇宙人と話そうとした秋野さんなら、ひょっとして俺のことをわかってくれるんじゃないか、そんな期待が動いたのも確かだった。  
その一瞬のすき、拒む間も避ける間もなく、体を起こした秋野さんが跳ねるような早業で、俺の唇を奪っていったのだ。  
体を強烈な光が走って、頭の中が真っ白になる。  
(今の、今のって)  
「よおし！」  
俺の狼狽に全く気づかずに、秋野さんは片腕をつきだしてぐっと曲げ、力を誇るような仕草をして上機嫌で喜んだ。  
「近江潤のキス、もーらいつ」  
体が震えてきた。頭が熱くなり、それが全身に広がって、震えとともに体の隅々まで駆け巡る。世界がいきなり陽炎の中に放り込まれでもしたように、ぼやぼやと輪郭を失っていく。体の中の青い炎が野火のように全身を走る。  
崩れそうになる体を、俺は必死に机にしがみついて支えたが、灼熱の波のよううねりに体がどんどん飲み込まれていく。  
息ができない。  
(これが...『密約』...)  
「賭けはあたしの勝ちだったなあ。あ、近江にもおごったげるね」  
秋野さんがあっさりと言って、俺は信じられない思いで相手を見た。  
(賭け、だって?)  
声が声にならない。今すぐにでもとろけて、原型に戻ってしまうのをこらえるのが精一杯だった。思考も感情も竜巻の中に投げ込まれたようにみるみるかき回されて、いっそのまま我を失って倒れた方がましな気さえした。  
そんな状態なのに、すぐにももう一度、秋野さんの唇がほしくて、その衝動が背骨を貫いて吹き出しそう。机から手を放せさえしたら、確実に秋野さんを押し倒している。  
「あんたときたら、頭がよくて顔がよくて、ガタイもよくて人もいいのに、女にはやたらと冷たいでしょう。だから、ターゲットになっちゃったんだよ。あ、それとも」  
秋野さんはふいと生真面目な顔になって俺を見た。  
「ひょっとして、男の方がよかったのかな。それなら、悪かったな、ちょっとまとまったお金がほしくてさ。今すぐ、うがいしてきてもいいよ？」  
(違う)  
俺はのろのろと首を振った。  
(それどころじゃなくて、あんたが、あんたのキスが)  
やっぱり声は出なかった。  
「女でいいのか。じゃあ、まあちょっとしたアクシデントだと思ってくれるといいかな？ これからは気をつけんだよ、かなり狙われてるから。じゃね」  
とってもうれしそうに部屋を出て行く秋野さんを俺はにらみつけた。振り返りもしない華奢な姿、もし、今俺が背中から襲いかかって抱き締めてしまえば、すぐに全てが手に入れられそうな後ろ姿を。  
これから、だって？  
あんた、俺にとんでもないことしちまったんだぞ。  
俺はがくがく震えてくる体をきつく抱いてへたりこんだ。周囲に起こっている全てのことが、何十倍もの刺激に増幅されて、体の中になだれこんでくる。

だめだ。  
秋野さんに『密約』、された。  
俺はもつ、だろうか？

「う…ん」

気がついたのは、あたりが夕闇の中に沈みきってからだった。体中が冷え冷えとして、寒さで凍りついてしまったような気がした。コンクリートの塊のような足を引きずり、ようやく立ち上がる。

何とかしてアパートに戻りたかった。

俺達の仲間で他の生命体と『密約』したものはいない。

そんなことができるとも思われてなかったはずだ。

(本当に『密約』だったのかな)

もし、『密約』でなければ、あの衝撃やこの寒さは何なのか。

(確かめることはできる)

『密約』の始まりには、お互いかなり緊密な『接触』を必要とするはずだった。生きていくためのエネルギー補給の方法が、それまでの外部からの物質によるものから全く違う形に移行するためだ。一日二日は、二、三時間おきに一回の『接触』がなければ、急激に体力を失い、死に至るはずだ。

もし、このままアパートに戻って、そのまま動けなくなり死んでしまうなら、俺は秋野さんに『密約』されていることになる。

けれど、万が一、ただ疲れ切っているだけなら、俺は明日の朝には多少なりと回復しているはずだ。あの秋野さんとの出来事は何だったのかと悩みながら。

「く…っ」

だが、頭の中とは違って、体の方は全く自由にならなかった。

机に寄りかかって壁に手をつき、ドアを開けて廊下に出る。そのまま、かたつむりがはうようなのろのろとした動きで、大学の門を出て行くまでに、一時間以上かかった。電車に乗れないばかりか、駅までもたどりつけないことは明らかだった。

揺れめく視界を必死に瞬きして目をこらし、大学前の道路をするすると近づいて来る一台のタクシーを見つける。

手を挙げて、タクシーが止まってくれるまでに、二度、ひどい波が襲ってきた。

頭の上から足の先へと命が引きずり出されるような脱力感で、座り込まないようにするのも苦労した。転がるようにタクシーに乗り込んでも、すぐに行き先が告げられない。

「お客さん、どうしたんです？」

バックミラーの中から、いぶかしげな不安そうな顔が尋ねた。

「具合悪いんなら」

降りてくれ、といわれるだろうかと一瞬肝が冷えた。

「病院、連れてきましょうか。この時間でも見てくれるところ、知ってますぜ」

ほっとして、俺は首を振った。乱れる呼吸を整えて、かすれる声を絞り出す。

「三田……霜橋町……日光アパート」

「日光、アパート？」

運転手はなぜか妙な繰り返し方をした。

「そこに住んでるんですかい？」

なぜ、そんなことを気にするんだろう、と思った次の瞬間、意識の全てを根こそぎさらうような波がやってきて俺はうめいた。

「ぐうっ」

足がいきなり形をなくした。ぐにゃ、と不安定な感触と一緒に支えがなくなり、靴下をいれたままで、靴が床に脱げ落ちる。

ごん、と無機質な嫌な音がした。

「お客さん？」

前の座席の方へ崩れ込んだ俺に運転手は車を止めた。

「ほんとに大丈夫ですか？」

俺は首を振った。

このままでは、タクシーの中で『原型』に戻ってしまう。

同時に、自分が秋野さんに『密約』されたことがはっきりわかった。そして、それが、どれほど追い詰められた状況かも。

俺がいるこの世界では、普通は、恋愛関係にあるか、それにかかなり近い親密な関係でない、キスしてくれとはねだれない。

いわんや、一方的に襲ってキスした場合には痴漢とか変態とかいわれてはねつけられるのが常だし、それでも諦めずに追い回せばストーカー扱いされるはずだ。

だからといって、他でもない、秋野さんが俺の望む通りにキスしてくれる可能性なんて、ほとんどない。それも一回や二回ではすまないのだ。少しの間とは言え、二、三時間おきのキスなんて、恋人同士でもしないだろう。

けれど、それなしでは、確実に俺は死ぬ。

暗く澱んでちかちかする視界に、俺をポッドに押し込めた父親や、爆発する宇宙船の中で笑っていた母親の顔が交錯した。

(あんな状態で助けてくれたのに、俺はこんなところで死んでいくんだ)

悔しいとも悲しいともいえない思いで胸がふさがった。

「秋野…さ…ん」

答えるはずのない『密約』の相手と呼ぶ。

呼吸が涙にせり上がって体が震えた。

「秋野？ 今、あんた、秋野っていったか？」

運転手がふいに間近で声を上げて、薄れかけていた意識を引き戻された。

「あんた、日光アパートっていったな？ 今の秋野って、日光アパートの秋野ひかりのこの人なのか？」

俺は顔を上げた。

運転手の顔はかすんでよく見えない。

(秋野さんを知ってる？)

助手席のところにある顔写真と、その横に書かれている名前を必死に読み取ろうとする俺の耳に、運転手の声がもう一度響いた。

「もしかして、あんた、近江とかいう奴か？」

(俺の名前？)

俺はのろのろとうなずいた。

視界が少し明るくなって、ネームプレートが読めるようになった。

『秋野太一』

「あきの…たいち」  
「おうよ、わしの名前だ。するとおまえか、ひかりの同居人って。ちっ、つまんねえのを乗っけちまったな」  
運転手はいきなりふてくされた顔になった。茶色に見えるぐらいに日焼けした男っぽい顔が大っぴらに不快そうにしかめられる。  
「同居…人？」  
（何のことだ？）  
「まあよ、乗せちまったもんは仕方ねえし、これも仕事だしな。日光アパート、連れてってやるよ。まあ、あいつもな、死んだニョウボに似て、いい出したらこっちのいうことなんか聞かねえし、へたなことすると、怒りやがるしな。また、これが、扱いにくいんだよ、怒るとよ」  
運転手の言っていることは半分もわからなかったが、一つだけようやく頭の中に形を成したものがあつた。  
「秋野さんの…おとうさん？」  
「お父さん、だあ？ いい気になんなよ、まだ早ええぞ、おまえを認めたわけじゃねえんだからな」  
むっとした顔で乱暴に車を発進させられて、俺は座席にのけぞった。無防備な背中をシートに叩きつけられ、呼吸が止まる。  
支えがなくなっている体が保てるわけはなく、そのまま横倒しにシートに崩れたのに、相手はぎょっとしたようだ。  
「おう、ほんとに大丈夫か？ どうしたんだよ、一体」  
それはこっちが聞きたいと思つたが、口さえも動かない。のろのろと足を探った手がぬめつとした液体に触れて、体の内側から凍りついた。  
（ほんとに、もたない？）  
爆発音。俺を呼ぶ父母の声。  
（いやだ、そんなの）  
荒い呼吸を繰り返し、流れ出していく気力を止めようとしたとたん、胸を傷めるような鮮やかさで秋野さんの笑顔がよみがえってきた。  
（秋野さん）  
せめて、もう一度、秋野さんに会いたい。  
「おい、着いたぞ！」  
気持ちが少しは支えてくれたらしい。秋野さんのおとうさんが慌てた様子でドアを開け放つたときには、何とか足を再生できていた。  
「どうしたって…歩けねえのか？ これ…靴…靴下まで脱いだのか？」  
秋野さんのおとうさんは、いぶかしそうに肩を寄せながら、支え起こしてくれた。そのまま、ぐったりした俺の体の重さによるめきながらも、アパートの方へ引きずるように連れていってくれる。  
「ったく…何を食って…でかくなりやがったんだ…ここまで」  
はあはあとあえぎながら、相手は俺を一〇六号室へ引きずっていった。  
「おーい、ひかりい！ 開ける！」  
結構響く大声に、慌てたようにドアの向こうで人の気配が動いた。  
「なあによ、急に今ごろ…近江?!」  
出てきた声の主が、父親ではなく俺を見てとんきょうな声を上げる。  
（秋野さん）  
「どうしたの！」  
「こっちが聞きてえよ、大学前で気分悪そうにしてたから…それより、わざわざ娘の同居人を連れてきてやっただから…おい！」  
止まらなかった。  
秋野さんの声を聞く前から、その存在の波動とでもいうようなものを、俺の体を感じていた。  
生涯ただ一人の『密約』の相手。  
そして、俺はその相手から離されて、今にも死にそうになっている。だから。  
いや、本当は、そんな理由なんか後でつけたようなものだと思う。  
秋野さんが姿を見せたとき、足に力が戻った。秋野さんのおとうさんの支えを振り切り、両手を伸ばして秋野さんを抱き締める。  
いつかの公園の噴水の水のように。  
きっと彼らも秋野さんをこうしたかったに違いない。  
俺は秋野さんの顎を押し上げて、あっけに取られて開いているその唇に、自分の唇を押しつけた。  
次に味わったのは、めまいがするほどの幸福感と安堵感だった。  
（もう、死ななくていい）  
もう、どこへも行かなくてもいい。  
俺はここなら生きていける。  
俺はすぐに気を失った、経験したことのない喜びに包まれて。

とても幸せに眠ったのに、夢はやっぱりひどかった。  
繰り返される爆発、逃げ惑う仲間、そして、脱出ポッドに一人押し込まれる俺。  
引き裂かれて飛び散る父親、炎の渦に飲み込まれてそれでも笑う母親、悲鳴と絶叫、暗黒の宇宙に滅亡の光の華が咲き乱れる。  
そして、青い地球。  
どこまでも青い、母親の胎内のような、父親の腕の中のような、優しい祈りを満たした紺藍の惑星。  
そこへ飲み込まれて、それでも一人、たった一人、永久に一人の俺…。

「くっ、ふっうっ」  
目が覚めるとやっぱり、それも盛大に泣いていた。  
枕元に小さな赤い目覚まし時計があって、それが音楽を鳴らしている。  
この曲は、知っている。  
知っていて、でも、絶対に聞きたくない曲、『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』。  
私を月まで連れて行って、という題の歌。  
そのせいだけではなかった。  
体中が冷えてきている。足元から覚えのあるだるさはい上ってきている。エネルギーが切れてきたのだ。  
(何にも、変わってないんだ)  
秋野さんは部屋にはいなかった。  
布団に寝かされた体は、もうずっしりと重くなってきていて、このままでは遠からず溶け出すのは目に見えていた。  
さっきは勢いで唇を奪ってしまったけど、今度はそうさせてくれないだろう。  
「近江？」  
ドアの開く音と、ナイロン袋がこすれあう音がして、優しい声が響いた。  
「目が覚めたのか……どうした？」  
秋野さんが部屋の小さな明かりの下に顔を突き出して、俺をのぞき込んでいた。  
体の細胞が一斉に声を上げて騒ぎだすのがわかった。  
『密約』者がそこにいる。早くエネルギーをもらうんだ、と。  
「泣いてた、んだ？」  
「秋野さん」  
指先で頬をそっとなでられて、俺の自制が吹っ飛んだ。  
「キス、してよ」  
気が付くと、俺は秋野さんに向かって憶面もなくねだっていた。  
(そんなこと、無理だ)  
心の閃いた反論に耳を塞ぐ。  
「キスしてよ……でないと…俺…死んじゃう」  
なんて半端な告白。  
(無理だって、わかってるのに)  
心の中の『近江潤』が重苦しく首を振る。  
秋野さんは一瞬大きく目を見開いた後、何だか険しい顔で俺を見下ろしている。  
今にもここから逃げ出してしまいかもしれない、とそんな恐怖が襲ってくる。  
けれど、体の焦りはそれよりはるかに大きかった。  
「せっかく……父さんと母さんが助けてくれたのに…助けてよ…秋野さん」  
涙が溢れた。  
(もう、だめだ)  
繰り返してねだる間も脱力感がひどくなってきていた。ともすれば、意識が遠のいていきそうになる。  
秋野さんは何を思ったのか、いきなり俺の布団をはいだ。ひやひやとした空気が直接体に触れて、なぜか、服を着ていないとわかった。その胸元まで布団を引き下ろした秋野さんは、やがて、そっと静かに布団を戻した。それから、じっと俺を見つめる。  
何か不思議な視線だった。問いかけるような、そして、どこか心配そうな。  
それとも、それは俺の思い込みだったのだろうか。  
ふいと唐突に目を逸らして、秋野さんはドアの方を見た。立ち上がり、ドアの方へ歩いて行く。  
(だめだ…捨てられる)  
胸にことばが詰まって、俺は目を閉じた。涙がまたこぼれ落ちる。その涙と一緒に体の細胞も溶け出し、流れだしていく気がした。  
「ん…」  
けれど、ふと、閉じたまぶたの向こうを陰が過った気がして目を開けようとした俺は、唇に柔らかく温かなものが当たったのを感じた。顔の横に秋野さんの両手が置かれているのがわかる。俺の体を気遣ってか、もたれてはこないけど、それでも確かに秋野さんは俺に唇を合わせてくれている。  
夢だろうか、現実だろうか。  
(夢なら、夢でもいい)  
こんな夢の中で死ぬのなら、悪夢の中で毎日死ぬのよりよっぽどいい。  
俺は両手を上げた。秋野さんを抱き寄せ、強く抱き締める。びくっと体を震わせた秋野さんを逃がすまいと、より強く唇を押しつけたとたん、  
「っ！」  
突然きつく唇を噛まれた。  
慌てて手を放し、目を開ける。  
「近江」  
唇を手の甲でいまましようにこすった秋野さんに、俺はことばを失った。  
「一体、何のつもりだ」  
秋野さんの目が怒っている。今まで見たことがないほど、荒々しい目だ。  
ひよっとすると、もうキスしてもらえないかもしれない。  
「俺は、秋野さんが」  
いいかけて、口ごもった。  
体は今キスから受け取ったエネルギーで満たされて、温かくて気持ちがいい。俺はやっぱり秋野さんに『密約』されていて、秋野さんなしでは生きていけないのだ。

けれど、それは『好き』だということとはまた違うのだろうか、と思った。ためらった俺を、秋野さんは見逃さなかった。

「秋野さんが、何なんだ」

頬が赤く燃えている。瞳がちかちかと燐光のように光っている。どこかくやしそうに見えるのは気のせいかもしれないが、秋野さんは十分にきれいだった。

「秋野さんが……必要なんだ」

「ほう」

ごくりと唾を飲み込んでしまって、誤解されたかも知れない。

(でも、誤解じゃないよな、たぶん)

俺は秋野さんが、まだほしい。

「女っけなしは訂正だな、ずいぶん口説き慣れてるじゃないか」

突き放すような男口調でいわれて、俺は我に返った。

秋野さんは本気で怒ってるんだ。

急にぐでぐでになって担ぎ込まれてきたかと思えば、父親の前でいきなりキスしてきて、あげくの果てに気を失って。それで介抱してやっていけば、夜中に秋野さんに襲いかかってくる、とんでもない男だと思ってる。

秋野さんは冷ややかなさっけない動作で俺の側を離れて、鳴り続けていた目覚ましを止めた。ナイロン袋を開けて、中味をあちらこちらへ片付け始める。

熱冷ましの湿布、曲がるストローつきのジュース、小さなパン。タオルにどうやら男物らしい下着一組。

(俺のために買ってきてくれたんだ)

俺はうれしいよりも切なくなった。

秋野さんは優しい、秋野さんは親切だ。

けれど、それとこれとは話が違う、病人だから介抱した、元気になったんならさっさと出て行け。

そう言われているんだ、と気づいた。

「あ、あの」

「うん？」

秋野さんは布団に体を起こした俺を振り返った。そのまっすぐな視線に思わずうなだれてしまう。

(どう言えばいいんだ?)

俺は実は地球外生命体で、ここにいる『近江潤』というのは仮の姿で、本当はコバルト・ブルーでぬるぬると動くスライム状態の不定形宇宙人で、地球には宇宙船の事故で落ちたんだ、と?

そんなこと、誰が信じてくれる?

そのうえ、『成人』した俺達は、エネルギーを分かち合う相手と生涯生死を共にするのだ、なんて?

ましてや、俺の生死は、実は秋野さんのキス一つにかかっている、特にこの数日は、二、三時間ごとにキスしてもらう必要があるのだ、などと?

(言えるわけがない)

言っても信じてくれるわけがない。

絶望で目の前がくらんだ。

「ごめん。ありがとぅ…ずいぶん、元気になったから…出て行く」

俺はことばを絞り出した。

出たら最後だとわかっていた。二度と秋野さんは俺に会ってはくれないだろう。

そうなれば、俺は明日の朝には見事に溶けて、下水に流れ込んでいはいはずだ。

(明日の朝には…あれ?)

ふと、俺は妙なことに気がついた。

赤い小さな目覚まし時計を振り返る。もう夜中の三時になろうとしている。俺が倒れたのは夕方だった。あの直前に、秋野さんにキスしていたから二時間、いや三時間もったとしても、どうして今まで無事だったんだ?

それに、何でこんな夜中に、目覚まし時計がセットされてるんだ?

「大体、三時間ごと、みたいたから。夜中に眠ってたらわかんないだろ。でも、心配で結局眠れなかったよ」

まるで、俺のその疑問に答えるように、秋野さんが小さなため息をついてつぶやき、あらためて俺を見つめて尋ねた。

「もう、大丈夫なの？」

そのことばの意味がわかるまで、かなりの時間がかかった。

「秋野…さん？」

俺があんまり間抜けた顔をしていたんだろう、秋野さんはくす、と苦笑してこちらへ近づいてきた。

「本当はなんて呼ばれてる？ 生まれた星じゃ、そんな姿じゃないんだよね。今だって悪くないけど元の姿も結構気に入ってる。見たことがないくらいきれいな深いブルーだった」

「俺…？」

俺の心を支えていた克己心みたいなものが、音をたてて崩れていくのがわかった。

「覚えてないみたいだから、教えてあげるよ。あんたは昨夜運び込まれてから、二回、人間じゃなくなってる。あえていえば、コバルト・ブルーのスライム、かな」

ひんやりとした恐怖が体を貫いていった。

(秋野さんの前で、戻ったのか)

ただでさえ『密約』してくれにくいのに、そんな姿を見たら、たいていの女性なら二度と関わりたくないと思うだろう。

それで、さっき秋野さんが取った行動の意味がわかった。秋野さんは俺がまた『コバルト・ブルーのスライム』に戻っていないかを確かめていたんだ。

俺がよほど強ばった顔になっていたんだろう。秋野さんはなだめるように言った。

「一番初めは悪いけど、逃げかけた」

(やっぱり)

それが普通だよな、と落ち込んだ俺の耳に、ふいに優しくなった声が届く。

「そしたら、あんた…小さな声でつぶやいたんだ。『おかあさん、おとこさん、ぼく、しんじやう』って」

顔に見る見る血が上っていくのを感じた。

誰も知らないはずの俺、それを秋野さんに見抜かれて、うれしいのか恥ずかしいのかわからなくなった。

「あんたが運び込まれたときに、やたらとキスしたかったから、ひよっとしたらと思ってさ、ちょっとキス、してみたんだ。そしたら、見る見る元に戻ったよ。えーと、だから、服が脱げる」

秋野さんは少し赤くなった。  
「キス、してくれた？」  
「うん」  
「スライム、なにに？」  
秋野さんはふんわりと笑った。  
「ほっとけないだろ、ほんとに、ちっさな、ちっさな男の子の声だったんだ。そのときも泣きじゃくってて、とてもつらそうだった」  
俺は胸が一杯になった。  
「どうしてここにいるの？ 何で、その、えーと、故郷の星に帰らないの？」  
秋野さんは次のことばを少しためらってから、それでも、そっと優しくささやいた。  
「どうして『あたし』が必要なの？ 全部話してくれるなら付き合ってもいいよ、近江と」  
秋野さん。  
この人が俺の本当の『密約』者なんだ。  
俺はそのとき、故郷から遠く離れたこの星で、自分が正しい『密約』の相手を選んだことを悟った。

「俺は…ヴラン、て呼ばれてた」  
 秋野さんの部屋、女性の部屋にしては、俺の部屋と同じぐらいそっけなくて何もない六畳間の真ん中に敷かれた布団に横たわったまま、俺は話し出した。  
 秋野さんは部屋の片隅で小さな折り畳みの机に肘をつき、片手にコーヒーカップを手にして、じっと俺を見つめている。  
 部屋の中には常夜灯のような小さな明かりが一つ、それは秋野さんの考え込んだ頬の産毛を照らしていて、柔らかな温かな気配が部屋中を満たしている。  
 俺はゆっくりとため息をついた。  
 不思議ともう呼ばれることのない懐かしい名前に伴った記憶をたどるのも、秋野さんの側なら耐えやすいような気がした。  
 「宇宙船の事故で落ちただけけど……月旅行に来ていた」  
 秋野さんがぎょっとした顔になるのに、少し笑って見せる。  
 「信じるかどうかは別だけど、『地球』の生命体が見つかるかもしれないスリリングな旅、として人気だったんだ。『地球』は俺達の星では辺境区にあたっていて、宇宙法も守らない未開惑星の一つで、まだ俺達やその他の宇宙の世界のことを何も知らない。それでも、安全な旅、のはずだった、父親と、母親と、俺と」  
 胸の奥がしくっと傷む。  
 「家族、がいるんだ」  
 「いた、んだよ」  
 俺の訂正に、秋野さんは顔を強ばらせた。  
 「ごめん…」  
 「いいよ。とにかく、宇宙船の事故が起きて、いろんなことが重なってしまって、逃げられたのはほとんどいなかった。俺は父さんが脱出ポッドに押し込めて、母さんが『地球』に向けて送り出してくれて…」  
 ヴラン！ と最後の叫びが、もう一度強く耳の内側を打ったような気がして、俺はことばを飲み込んだ。  
 「だから…？」  
 「だから」  
 同情を含んだ秋野さんのことばを遮って続ける。  
 「『地球』に落ちたのは、五年ほど前になる。今思うと、日本の中央ぐらいの山の中だったのかな。春、だったよ。緑が鮮やかで、側の湖を風が渡ってて」

ポッドは湖の間近の雑木林に落ちた。  
 そこは沼地になっていて、半分近くめりこんだ機体は爆発することもなく、気がつくとも衝撃のせい、ハッチが開いていた。どれほどそこでぼんやりしていたのか、わからない。開いたハッチの向こうを、黒い影が過って我に返った。  
 あれは何だろう、と俺は思った。  
 そういえば、『地球』の生物を直接見たことなんてない。きっと仲間の誰だって、いや、故郷の学者だって、自分の目で確かめたことなんてなかったはずだ。  
 何せ、『地球』は未知で未開の危険な星でもあったのだから。生物が生存するに足る環境、しかし、その星の生物は攻撃的で野蛮で愚かなものが大半を占めている、と言われていたわけ。  
 ぼくが見るのがきつと初めてだ。  
 事故にあって死にかけたっていうのに、家族をすべて失っただけじゃなくて、故郷さえも失ったというのに、何だかわけのわからぬ興奮に襲われたのを覚えている。  
 苦労してそこから滑り出したとたん、青と緑の世界が目の前に広がった。  
 地球って、きれいなんだ。  
 そうぼんやりと思った。  
 風が香気を伴って吹き過ぎていった。  
 遠い緑の中で、ちちちと鋭い何かの鳴き声上がり、それに応じるように手近の木の枝で、同じような黒い影がちちちと声を返した。だが、それで、音はやんだ。  
 山は静かで、穏やかで、平和だった。  
 (みんな、いない)  
 ふいに、何もかもすべてを越えた理解、のようなものがわいた。  
 (ぼくは一人になったんだ)  
 落下の衝撃で打ちつけられた体中が痛みだし、俺はうずくまり、やがて身をよじって転がった。  
 辺りは静かだった。さっき鳴き声を上げたものもいなくなり、生き物の気配はしなくなった。  
 その静まり返った牧歌的な情景の中で、俺はほとんど一昼夜、体の痛みにも苦しみもがいた。繰り返す痛みで神経を破壊され尽くした気がして、必死に助けを求めた父母も今ほどこにもいないとわかって、俺は心身ともにばらばらになりそうだった。  
 なのに、次の日の朝、やっぱり目を射るほどの太陽で目覚めると、日の光に照らされた鮮やかな緑と青の世界は、やはり本当にきれいだとしかいいようがなく、俺は初めて泣いた。  
 もう、戻れない。もう、誰もいない。  
 俺はここで生きていくしかないんだ、この目に染みるほどきれいな世界で。

「何もできなかったんだって、わかったからかもしれない。父さんや母さんが必死に逃がしてくれたのに、俺はここでどうやって生きていけばいいのかわからない。何をすればいいのか、わからない。これから、どうなるのか…わからない」  
 (ああ、そうだ)  
 つぶやきながら、そう思った。  
 俺はここにこうしているけど、これからどうすればいいのか、本当にわからなくなってしまったんだ、と。  
 (大人になったのに、『成人』になったのに)  
 「近江…」  
 秋野さんがふいと手を伸ばして、俺の頭に触れてくれた。  
 「つらいなら…」

「いいよ、つらくても」  
俺は少し頭を振って、秋野さんの指を避けた。そのまましていると、果てしなく秋野さんに甘えて泣き出しそうな気がした。  
「つらくても、現実なんだ」  
強がって、息を吐き、時計を見た。まだ、次のキスまで一時間はある。今度はキスしてくれるかな、と思ったのが伝わったみたいに、秋野さんは小さく咳払いをして、尋ねた。  
「『近江潤』は、いるの？」  
「うん、いる。というより、いた、といった方がいいよね」  
「…あんたが？」  
一瞬ためらった秋野さんの問いかけは予想していた。  
「違う。けれど、生きてくつもりはなかったみたいだよ。ポッドで苦しんで、その後、そこから離れて湖の方へ行ったら、俺の目の前で水に飛び込んだから」  
「自殺？」  
「う…ん」  
俺は口ごもった。  
厳密にいうと、落ち込んで、これからどうしようかと思って湖をのぞき込んでいた俺に気づかず、そのころ、中学生だった近江潤は俺の上に飛び降りてきたのだ。  
巻き込まれて湖に投げ出され、とっさのことなのだろう、近江潤が俺の体をつかんでもがくの、俺はパニックになった。必死に振りほどこうとしたとき、突然相手の体から、あふれかえるような情報がなだれ込んで来て、俺は気を失ってしまった。  
気がつけば、湖の岸に俺は打ち上げられていた。側にやっぱり近江潤も転がっていたが、それはとっくに鼓動を止めた物体だった。  
初めて接触した『地球』人がいきなり死んでしまって、俺は二重に困惑した。  
「とりあえず、なだれ込んだ情報を頼りに服を探ったら、保険証と学生証が出てきたんだ。お金はほとんど持ってなかった。近江潤はその前の年の暮れに両親を火事でなくしてて、身寄りは一人もいなくなっていた。福祉事務所から手続きされて、学生寮みたいなところへ入るはずだったんだが、将来を悲観してたんだらうな。ふらふらとそこを飛び出したらしいよ」  
近江潤の境遇は俺にとてもよく似ていた。いきなり情報を吸収してしまったのも、何かお互いの間に共鳴するようなものがあったのかも知れない。  
「俺は、『近江潤』を借りることにしたんだ。身寄りがいないことも、一応学生寮みたいなところにいられるのもありがたかった。移ったばかりだったんで、周囲もあまり近江潤のことをよく知らなかったから、目立たなかったしね。中学の一年、俺はひたすら『地球』のことを学んで、高校に進学して、そこでもバイトしながら学び続けた」  
「そして、この大学に来た、ってわけか…どうして、大学に来た？」  
「それは…」  
いつか来る、『密約』のときに不幸な選択をしなくなかったから、とはさすがにいえない。社会に出てしまえば、否応なく周囲の人間と濃く関わっていかなくてはならなくなる。そうなったときに、『密約』状態になれば、悲惨な状況になるのは目に見えていた。  
第一、結婚だの、恋愛だのという中途半端な関係ではいられないのだ。  
「あのさ…じゃあ、近江潤の死体、の方は…」  
秋野さんはいいにくそうに尋ねた。  
「湖に沈んでるか、どこかに埋まってると思う。この五年、そこで死体が発見されたって話は聞かないから」  
「あの辺りは、人が入らないものなあ…ふうん、そうだったのか、近江潤は、宇宙人、だったのか」  
秋野さんが今さらのように繰り返して、俺は不安になった。  
「信じて、くれてない？」  
「信じるも何も、なあ。目の前でスライム状態を見てるとなあ」  
どこか父親に似た伝法な口調でつぶやいて、秋野さんはこくん、と喉を鳴らしてコーヒーを飲んだ。  
「それも、中学のころから、そうだったのか」  
秋野さんがぼつりと付け加えて、俺はふとその微妙な口調に気がついた。  
「ひょっとして、秋野さん、『近江潤』を知ってる？」  
何か不安なものが広がってくる胸の痛みを感じないようにさりげなくきく。  
「うん、まあ、その」  
秋野さんはコーヒーカップを置いて、居心地悪そうに俺から目を逸らせた。  
「中学高校、同じだったんだよ。学年も違ったし、こっちの方が年上だったし、そっちは気づかなかったみたいだけ」  
「え…？」  
（近江潤、を知っているんだ）  
生前の、本物の近江潤を知っている人間が、こんな間近にいたなんて。  
そういう衝撃と、もう一つ。  
秋野さんがフルネームで覚えるほど、近江潤を知ってる、なんて？  
「その、つまりさ」  
秋野さんは少し赤くなっただけだった。  
「そのころから結構目を引くキャラクターだったんだ、本人はどう思ったか知らないが、で、ラブレターなんてのを出したこともある。覚えてないよね？」  
とっさに、どっちの俺に出してくれたんだ、と聞こうとしてことばが凍ったのがわかった。  
（そんなこと、わかっているじゃないか）  
「そうか、それで、何だか少し感じが変ったなって思ったのか。両親を亡くしたせいだと思ってただけで、そのせいばかりじゃなかったんだな」  
秋野さんは独り合点している。  
その横顔を見つめながら、俺は、じりじりとしたどす黒い不安が沸き上がってくるのを感じた。  
両親を亡くした近江潤。母親を亡くした秋野さん。同情が好意にすり替わったのはいつだろう。好意が恋愛になったのはいつだろう。  
（ひょっとして、秋野さん）  
「同じアパートでラッキーだなんて思ったのも気づいてなかったよね。ああ、まあ、その、ぶっちゃけるとさ、あのキス、満更賭けのためでもなくてさ、これで公然とせまれるなんて思ったのも確かなんだよね、うん、女も年をとると、アクションに焦りが出るっていうか」  
秋野さんは俺の不安に気づかない。気づかないまま、ぼんやりとした明かりでもわかるほど、可愛らしく頬を染めて、近江潤に告白タイムに入ってしまった。  
「でも、それが、こんなことになってるとは思わなかった」

くすぐったそうに笑ってつけ加えた。  
「あのキスは何なの？」  
「あれは、俺の星では『密約』って呼ばれてる…俺達は『成人』になると、『恋愛濃度』になって、そのときに強い感情を伴った『接触』を受けると、『密約』されるんだ…」  
おさなりに答えながら、俺の中で不安はどんどん黒いタールのように粘っこく苦い塊になって膨れあがりつつあった。  
「『密約』されると、俺達は、その相手のエネルギーだけで生きる……相手が死ねば俺も死ぬし……特に始めの方は、数時間おきに『接触』が必要で…そうでないと、溶けて、死ぬことになる」  
「それって、ひどいよね、だから、あんなに必死だったのか……近江？」  
秋野さんはこちらを照れたように振り向いて、緊張した表情になった。  
「気分悪いの？ 顔、真っ白だよ」  
時計を振り返って時間を確かめ、もう一度、俺をのぞき込む。  
「もう時間なのかな？」  
(秋野さん、あんた)  
気づいている？  
いや、気づいてなんかいない。  
近江潤にようやく想いのたけを伝えられて秋野さんは舞い上がってる。ましてや、近江潤と一緒にべったりいられる、生きていくのに必要だとさえ言われて、本当に嬉しそうだ。  
(けれど、その近江潤って、誰なんだ？)  
秋野さんが俺を助けてくれたのは、『近江潤』だからじゃないのか？ スライムになっても宇宙人だと聞いても平気なのは、『近江潤』だと思えているからじゃないのか？  
けれど、『近江潤』はもういない。ここにいるのは、俺でしかない。『近江潤』じゃないのに、秋野さんは『近江潤』につき合っているつもりなんじゃないのか？  
(それって、つまり)  
俺は秋野さんが必要だけど、秋野さんが必要なのは俺の外側、つまりは幻の姿だということ、もし万が一、俺が『近江潤』の形を取れなくなったら、すぐにでも捨てられるってこと、じゃないのか？  
「キス、しようか？」  
どこかいそいそと秋野さんが近づいて来て、唇を寄せてくれた。  
目を閉じて受ける、柔らかで甘い唇。  
体に満ちてくる温かで強いエネルギー。  
それがふいに、必死に差し伸べた俺の手を擦り抜け、背後に重なる『近江潤』の姿に流れて行くような気がした。

玄関のベルが鳴って、俺は立ち上がった。

「お帰り、時間がかかったね、秋野さん...」

秋野さんだと思い込んで勢いよくドアを開け、俺はそこにのっそり立っていた男にぶつかりそうになった。

「まったく、なあんだよ、なんで、てめえが出迎えるんだ？」

「...のお父さん」

俺は慌ててことばを継いだ。

「お父さん、は早ええって言ってんだろ、ああ？」

相手はむっつりとした顔でうなるように応じて、ズボンのポケットに手をつっ込んだままじろじろと俺を見ていた。

「で、入っていいの、だめなの？」

「あ、どうぞ」

慌てて戸口をのくと、のしのしとことさら体を振るように入って、秋野さんのお父さんは折り畳み机の向こうにどさっと腰を落とした。ポケットからタバコを取り出して点けようとしたが、ふと気づいたように周囲を見回して尋ねた。

「灰皿、ねえの？」

「吸わないんで...すみません」

「あいつが言ったの？」

「は？」

「あいつだよ、あいつ。ひかりが吸うなって言ったの？」

「いえ、その」

俺は思いっきり叱られている子どものような気がして、秋野さんのお父さんの前に正座した。

「苦手なんです」

「ふうん、まあ、いいことだよな」

秋野さんのお父さんはタバコを諦めたらしい。未練ありげにそろそろとタバコをポケットに片付ける。そのまま、部屋はしんと静まり返ってしまった。

日ざしが一杯に差し込んでいる。

秋野さんのお父さんにここへ運び込まれて数日が立っていて、俺の体もかなり回復していたし、キスの感覚も十時間は持つようになって来ている。

だから、こうして、秋野さんがでかけている間をぼんやりと待っていることもできるようになったのだが、まさか、秋野さんのおとうさんがやってくるとは思っていなかった。

「で、なんだ、その」

「はい」

唐突に相手が話し出して、俺は戸惑った。

「うちのといつまで付き合うつもりなんだ？」

「え？」

「だからよ、結婚とかそういうのまで決めてんのかって聞いてるんだ、わかるだろ、それぐれえ」

そう切り返されて、俺はふいに気がついた。

(そうか、もう、どうしてもここにいくちゃいけないってわけじゃないんだ)

キスとキスの間の時間はこれからどんどん長くなるだろう。最終的には、一回キスしてもらえれば数日持つようになるかも知れない。

けれど、それは、秋野さんが一緒にいるからだ、ともわかっていて、実際、秋野さんが側にいないときはエネルギーの消耗が早いのか、すぐに手足が冷たくなって震え出すはめになる。

けれど、それは、秋野さんにとっても、俺が大事ということじゃない。

「結婚っていうのは、その...」

俺は思わず暗い声になってしまった。

「なんだあ？ てめえ、遊びでひかりと一緒に暮らしてんのか、ええ？」

いきなり吠え出した番犬みたいにすごまれて、俺は怯んだ。

「あ、遊びだなんて」

遊びならずと楽しかった、と身を切られるように思う。

ただの遊びとか楽しみなら、秋野さんが俺じゃなくて『近江潤』に惚れているとわかった時点で、それはそれと割り切ることもできたのだ。

けれど、俺はしっかり秋野さんに『密約』されていて、そのつながりはこの数日で格段に強くなっている。俺が生きていくためには、秋野さんじゃなくちゃだめだ。けれど、秋野さんは俺じゃなくていい。

そんな二人じゃ、結婚どころか恋愛以前の話になってしまう。

それでなくても、つながりが確実になるほど、俺の不安は胸の奥で小さなけれどもとげとげした芽をふいている。

ひょっとしたら、ある日ふいと、秋野さんはここからいなくなっちゃうんじゃないか、という不安。俺を残し、本当に好きな奴、『近江潤』という幻なんかじゃなくて、秋野さんが必要とする奴のところへ行ってしまうんじゃないか、という不安。

(結婚できるなら、したいのは俺だ)

少なくとも、結婚すれば、秋野さんを突然失う恐怖に脅えなくてもすむだろう。形式だけにせよ、社会的には拘束できるし。

けれど、『近江潤』に惚れているとわかった秋野さんに、そんなことを言い出せるわけもなかった。

「俺は、秋野さん、大事です」

口ごもりながらつぶやくと、秋野さんのお父さんはぶいと横を向いた。

「父親に向かってたいした度胸だな」

「そんな」

「てめえよりずっと、ずっと、ひかりは大事な奴なんだよ」

吐き捨てるようにいわれて、俺はすくんだ。

「そう、です」

俺だって、こんな星に落ちたくて落ちたわけじゃないんだ。俺だって、本当は、秋野さんなんか。

そう胸の中で反論したとたん、公園で水を抱き締めようとしていた秋野さんがまばゆくよみがえってきて、体が震えた。

(秋野さん、なんか)

「そうです、じゃねえだろ」

はあ、と相手は疲れたように息を吐いた。

「付き合ってる女の親だからって、好き放題いわれて腹立たねえのかよ、てめえは、え、なんていったけ」

「近江...潤、です」

「じゃあ、まあ、その、くそ、落ち込んでるなら、いいもんやるよ、近江潤」

「は？」

秋野さんのお父さんは不機嫌二百パーセントで白い封筒を取り出した。

「そのかわり、あいつには黙ってろよ、ひどい目にあうからな。万が一しゃべったら、以後ひかりと付き会わせねえからな。じゃ、まあ、よろしくいってくれ」

俺の返事を待つまでもなく、すたすたと部屋から出て行ってしまう。

なぜか急に軽くなったようなその足取りに、俺は秋野さんのお父さんが、実はこれを渡しに来たのだと気がついた。

立つことも思いつかずに見送って、閉まったドアに再び、封筒の表書きに目を落とす。

『近江潤様』

そうある。

裏返すと、小さく緊張した字で『秋野ひかり』と書かれていた。

(ラブレターだ)

秋野さんが近江潤に出したはずのラブレター。どうしてそれが、こんなところにあるんだろう。

(俺あてじゃない)

そう思ったけれど、誘惑には耐えられなかった。そっと封を切り、中身を取り出す。

薄いピンクの便箋が二枚、細い紺色の文字がきちんと真横に並んでいる。

『近江潤様。』

突然お手紙を差し上げてすみません。けれど、どうしても、何だか気になってしかたなかったのです。前ほど笑顔がないのが、何だかさみしいです。いろいろとつらいことがあって、それで、とても笑えないのかもしれませんが、それでも、人間がんばらなくちゃ、きつとだめです。私も、おかあさんが死んでから、家の中のどこを見ても、おかあさんがいるみたいで、けれどどこにもいなくて、ずいぶんつらかったけど、それでも、私は生きてるんだから、生きていくのが大事なんだから、おとうさんがいいました。それって、ほんとうのことだと思います。きつと、いつか、がんばってよかったなって思う日が来ます。あの時がんばった自分はえらいって思える日が。ずいぶん、きついことをいってすみません。私は、一年のとき、近江君が近所の猫を拾ったのを見て、いい人なんだなあと思いました。それから、ずっと気になってました。最近、しんどそうに見えて、よけいに気になります。早く元気になってください。

秋野ひかり

追伸。私でよければ、話し相手になるよ』

「秋野さん、らしいや。これのどこがラブレターだって...？」

笑いながらつぶやいたとたんに涙がこぼれ、俺はびっくりした。急に大声を上げて泣き出しそうになって、慌てて口を掌で覆う。

その手紙は、まるで、俺にあてたものみだったからだ。

事故の後、ポッドに閉じ込められて『地球』に落とされ、『近江潤』の姿を借りて死に物狂いで生き抜いていたあのころの俺に。毎日毎日緊張で疲れ切って眠る、それでも見る夢がいつも事故の夢で、何度も諦めかけた俺に。

あのとき、この手紙を受け取っていたら、俺はずいぶん楽だっただろう。

(でも)

俺は猫を拾っていない。これは俺あての手紙じゃない。秋野さんが気遣って、心配して、守ろうとしていた相手は俺じゃない。

それがはっきりわかった。

(出て行くか?)

手紙を封筒に戻しながら、胸の中で自分に尋ねてみる。

(出て行って、それで、どこへ行くんだ?)

『近江潤』が死体になっている、あの湖とか?

悪い冗談だ。

(そんなことをしなくても)

もう大丈夫になったのだ、と秋野さんにいえばいい。回復して元気になったのだから、キスは要らないのだと嘘をつけばいい。そうして、どこかの路地の片隅で溶け崩れるのを待っていれば、俺は簡単にこの世から姿を消せる。

「ただいまあ、近江、たこ焼きあったよ、あれ？」

ふいにドアが開いて、俺は死ぬほどびっくりした。急いで封筒を隠したが、思いっきり不自然で、おまけに秋野さんの目は鋭い。

「何隠したの？ ん？」

首を傾げて、右に左に俺の背中をのぞき込もうとしながら、秋野さんが近づいてくる。

「いや、その」

その目から手紙をかばおうとした俺を、ふいに秋野さんはまじまじと見つめた。

「...何で、泣いてるの？」

「いや、そのっ！」

顔を覆おうとして腕を上げた瞬間、後ろにかばった封筒をあっさりもぎ取られる。

見事なフェイント。

「あーっ、これ！ 近江ィ！」

「わ、ごめん、お、俺あてだからって渡されて...！」

しまったと思う間もなかった。

「誰に、と聞くまでもないわな」

秋野さんは眉を寄せた。

「お父さん、あっこから取ったなあ」

「あっこ？」

「うん、同じクラスにいとこがいて、その子に近江に渡してくれて頼んだの」

(普通、頼むか、そんなの?)

俺は思わず崩れそうになってしまった。

「でも、渡し損ねてるって言ってたから、その間に取られたんだな。あっこってお父さんに齢から。小さいころ喘息があって、お父さんによく病院に運びこんでもらってたしな」

(昔からそんなことをしてたのか)

道理で俺が様子がおかしいとわかってても、対応が早かったはずだ、と思った。

それだけわかると、もうそれ以上秋野さんは手紙のことについて追求する気はなかったらしい。

「でも、ま、いいか。時間はかかったけど、読んでもらえたんだし」

机の上にたこ焼きを置きながら、にこっと笑って俺を見る。

ずきん、と体の奥が何かに貫かれたみたいに痛んだ。

(違うよな、本当ならそれは)

『近江潤』が読んでいたはずだ。そして、ひよっとすると、『近江潤』もさっきの俺みたいに、どこかで自分を支えてくれる手を感じてがんばろうと思ったも知れない。

それどころか、『近江潤』が秋野さんの手紙を読んでいたら、自殺しなかったかもしれないし、ひよっとしてひよっとすると、『近江潤』も秋野さんに惚れていたかもしれない。

(そのとき、俺はどうなってたんだろう)

無邪気にたこ焼きを広げにかかる秋野さんを、尋ねたくても尋ねられないまま、見つめてしまう。

「さあて、食べよ食べよ。近江、ほんとに食べないの？」

秋野さんが尋ねて、俺はようよう何とか笑みを押し上げた。

「いいです、俺、もう食べられないんです、エネルギーの摂り方が変わったから」

「ふうん、じゃ、おすわけ、ね」

秋野さんはべろっと猫みたいに唇のソースをなめてから、俺の口に顔を寄せた。

緩やかに唇から広がっていく力の波動。冷えて来ていた手足も体もゆっくりと温めてくれる命のエネルギー。

そのエネルギーの豊かさが、本当は俺のものじゃなかったのかもしれない。  
胸が苦しく辛かった。  
「おいしかったら、ごちそうさまっというもんだよ」  
唇を離すや否や、秋野さんは生真面目にいった。と思うと、くすくすっと楽しそうに笑って、次のたこ焼きを口にほうり込み、  
「でもさ、結構不便だよな、一人の人からしかエネルギーもらえないのって。そうだ、『密約』って、やり直しはきかないの？」  
無邪気な問いかけに、俺は崖から突き落とされたような気がした。  
「俺達はたぶん……でも」  
喉がからからになってくる。  
「秋野さんは地球人、だから、別に、大丈夫だと思うけど…」  
(それって)  
秋野さんは実はもううんざりしてきたってことなんだろうか。  
そんな俺の衝撃に気づかないふうに、秋野さんは突然いいことを思いついたという顔で、  
「そうだ。これまで五年間食べてきたから、ひょっとしたら、体が多少変わってて、食べても時間延ばせるかも知れない。そうしたら、あたしに何かあっても大丈夫だよな？」  
明るくうれしそうに言い放って、俺は海より深く落ち込んだ。  
「うん、じゃあ、食べてみる」  
「はい、どうぞ」  
『密約』後初めての食べ物。  
香り高いソースのおいしさに、ふんわりとした熱を放つ、ふわふわとした丸いもの。  
見慣れたはずのたこ焼きが、得たいの知れない奇妙なものに見えるのを我慢して、俺は口に投げ入れた。もぐもぐもぐ、と口を動かして、何とか飲み下す。  
だが、そこまでだった。  
「近江?!」  
口を押さえてトイレに駆け込んだ俺の背中から、秋野さんが走り寄って来る。  
「ごめん! ごめんね、大丈夫？」  
「うん、大…」  
大丈夫、何でもないよと笑って見せたのは『近江潤』の方だったに違いない。  
俺はそのままトイレから出られもせずに座り込んでしまったのだから。

久しぶりに事故の夢を見た。フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン。私を月に連れて行って。こんなことになるんなら、あのときあそこで死んだ方がよかった。父母と一緒に。炎に引き裂かれて散っていく仲間と一緒に。『密約』の相手は俺を必要としない。俺はどこにもいられない。月に連れて行ってくれ。月に。

「近江！」

「つつう！」

思いっきり頬を殴られて、目が覚めた。

視界が戻ったとたん、熱い涙がぼやぼやと世界をにじませ崩しながら流れ落ちていく。目の前にショートカットの髪に囲まれた白い顔があった。心配そうに見開かれた大きくてこぼれ落ちそうな瞳が俺を食い入るよう見つめ、温かくてしっとりした両手が俺の頬を包んでいる。

「大丈夫？」

「秋野さん...」

それ以上声を出すとしゃくりあげそうな気がして、俺はことばを飲み込んだ。ずっと大声で泣き続けていたように、声がひび割れがさがさになっている。それでも、俺が答えたことで秋野さんは安心したようだった。ほう、と深いため息をついて、

「よかった。何度呼んでも、揺さぶっても、全然起きないから、また何かあったのかと」気がつくくと、布団は上半身はぎとられて、秋野さんは寝ている俺にほとんど馬乗り状態になっているのぞき込んでいる。

「昼間、おかしなこと、させたから、調子を崩したのかと思ったんだ」

大きな瞳が潤んでいるように見えた。

「おかしな...こと？」

秋野さんに両頬を包まれながら、その感触に酔っていた俺は一気に現実に戻された。

「ほら、たこ焼き」

「ああ...また、溶けたか？」

俺は薄く笑った。たこ焼きのソースの味とともに広がったのは、重苦しい絶望感。

秋野さんが望んでいるのは俺じゃない。秋野さんが惚れているのは『近江潤』だ。そして、俺は、その体に乗っ取ってコピーしたスライムに過ぎない。

(秋野さんが心配してるのは、きっと俺じゃないんだ)

「大丈夫ですよ」

「うん、そうみたい。安心した。ごめんね、ほっぺ、痛かったろ？」

秋野さんはそうと俺の頬をなで上げた。かすかな震えが体の内側に走る。キスされなくても、俺は秋野さんに触れられることに過敏になっている。そのまま、何も考えずに、ずっと居たかった。

けれど。

秋野さんに触れられたせいか、やっぱりたこ焼きがきつかったのか、体に力が入らなかったが、何とか手を上げ、秋野さんの手を頬から離した。

きょんとした秋野さんが、はっとした顔であわてて俺の上から滑り降りる。

のろのろと顔をこすりながら起き上がると、秋野さんの体が離れたところから、冷たい何か染み込んで来るような気がして、無意識に体が強ばった。

(死の予感、とか？ できすぎだな)

秋野さんは少しためらったように俺を見ていたが、突然くるっと振り返って、鳴り続けていた目覚まし時計を止めた。俺に背中を向けたまま、どこか怒ったような口調で、

「目覚まし、本気で買い替えよう。この曲、だめだね。あんた、これがかかると、眠っても絶対泣くもん」

秋野さんの声に心配を読み取って、俺は胸が締めつけられた。

(買い替えなくてもいい、そんなに長く一緒にはいられないんだから)

口に出せないことばを、胸の奥でつぶやいてみる。

「でも、無理もないよね、あんなことがあったんなら」

秋野さんは低い声でいって、台所の方へ歩いていった。冷蔵庫を開け、オレンジジュースのバックを開けて、そのままこくこくと飲み下す。

時計は二時を示していて、俺はついこのあいの幸せな眠りを思い出した。

俺がスライム化するのを心配して、目覚ましで起きて介抱してくれていた秋野さん。

それがひどく遠い昔のことのように思えた。

今セットしているこの時間は、秋野さんがこの間から請け負ったアルバイトに出掛けるためのものだ。一週間に二回、黒いTシャツとジーパンに着替えて、人目を忍ぶように出掛けていき、一時間ほどしてから疲れ切った顔で戻って来る。

俺が同居していることでお金のことが問題なら、きちんと割り勘でやっていけるよといったのだが、そんなんじゃないよと取り合ってくれなかった。

そして、俺は夜中に秋野さんが何をしているのか、聞けないでいる。どこへ行くのかも全く知らない。実のところ、今日まで、知らないままでもいいと思っていた。

秋野さんが一緒に居てくれるのは事実なんだし、秋野さんが夜中にどこで何をしようとかまわらないと思っていたからだ。

(でも、秋野さんはひょっとしたら、本当に好きな奴が見つかったか何かで、それを俺に言いづらいただけかもしれない)

「じゃ、行って来るからね、眠ってて。あ、そうだ」

黒いバッグを手にして出て行こうとした秋野さんは、戸口で思い出したように振り返った。急ぎ足でほほ笑みながら、ぼんやりと布団の上で座り込んでいる俺に近寄って来る。

「忘れ物」

首を伸ばしてつぶやき、秋野さんはそっと唇をあわせてくれた。

キスは夢に揺さぶられて締めつけられた胸に、痛いほど甘かった。目を閉じて受け入れる。命の風が吹き込んでくるように、冷えていた体のあちらこちらに活気が戻ってくる。

本当は二度と離したくなくて、そのまま引き寄せ抱き締めて、秋野さんの吐息すべてをむさぼりたかったけど、俺はぎりぎり自制した。

「ごちそうさまでした」

唇が離れるのに、あえておどけてふざけて見せる。

秋野さんがびよこ、と眉をあげて見せた。

「うーん、何だか、腹減ったときのどんぶり飯、って感じだなあ」

「そんなことないよ」

俺は秋野さんの機嫌を損ねたんじゃないかとひやりとした。慌てて、  
「もっとおいしい」  
「ばか」  
秋野さんはふっと赤くなってつぶやき、くるっと背中を向けた。  
「よくそんなこと真顔で言えるよなあ」  
「秋野さん」  
呼びかけた声に秋野さんはきちんと俺の不安を読み取っていた。  
「怒ってないよ」  
ドアの方へ歩いて行きながら肩越しに伝えてくれる。それから、ちょっと振り向き、  
「寝ててね」  
うなずく俺に目を細めて笑って、ドアの外の夜の中へ、溶けいるように消えて行った。  
(秋野さんは優しい)  
閉まったドアをぼうっと見ながら、俺は唇に触れてみた。  
秋野さんのキスの後では、自分の指がひどく無骨で乱暴なもののように感じる。  
秋野さんが夜中にバイトに出掛けた出たころは、影のように秋野さんについていきたいという衝動を抑えるのに苦労した。けれど、いくら秋野さんが恋しくても、今夜はとてもそんな気にならなかった。もし、万が一、秋野さんが他の奴とどこかに出掛けているのなら、それを止める権利なんてないのだ、と思い知らされたからだ。  
俺にキスしてくれるのも、今日まで一緒にいてくれたのも、それはつまり、秋野さんの優しさの範囲、いい換えれば、死にかけてた宇宙人へのボランティアのようなものに近いんじゃないだろうか。死にかけていたのが俺でなくても、『近江潤』の姿をしていた奴なら誰でも、秋野さんは受け入れたんじゃないだろうか。  
そして、それはいつか、秋野さんが『近江潤』の幻なんかじゃなくて、本当に好きな奴が現れたら、俺はあっさり捨て去られるというじゃないんだろうか、という不安につながっていた。たとえその時、俺がどうなるうとも。  
『密約』はやり直せない。エネルギーは秋野さんからしかもらえない。だから、秋野さんを失ったら、俺にとっては、すべてが終わることになる。そんなことを、秋野さんは本当にわかっているんだろうか。いや、わかっている、カンケーナイ、のかもしれない。  
そして、その夜、秋野さんは、ついに帰って来なかった。

秋野さんを、俺は始業時間ぎりぎりまで部屋で待っていた。時計の音がとろとろと流れて行く夜の時間を刻んでいく。その中で一人座ったままでずっとドアの方を見つめていた。ふと、自分が、親から離されてダンボールの箱に入れられて置き去られた子犬のような気がした。自分が捨てられたこともわからないで、いつか誰かが迎えに来て抱き上げ、元通りにぬくぬくとした親の体の側へ戻してくれると信じて、じっとおとなしくしている子犬。雨が降り、風に凍え、腹が減って、身動きできないほど弱って、初めて何かを失ったことに気づく。

白っぽくて薄寒いような朝日が差し込んでも、部屋の中はいつもどおり静かで穏やかだった。秋野さんが戻ってこないことなんか、地球が繰り返す時間には何の影響もないといいたげに。

俺は目覚まし時計をわざと鳴るように合わせてみた。『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』が、いつも通り鳴り始める。その目覚ましを机の上に置いて、ドアの方を振り返った。けれど、いつまでたってもドアは開かれず、秋野さんが戻って来ることはなかった。

(もう、帰ってこない気なんだろうか)  
部屋には荷物が置かれたまま、そんなことはないはずだ。理性は主張するのに、不安はともすれば胸に広がり、体をすくませてくる。

(二度と会えない？ 失ってしまう？ あの事故のときみたいに)

首を振り、目覚まし時計を止めた。

(違う、きっと何かできるはずだ)

俺だって、あのときのままの子どもじゃない。今度はきつと、何かできるはずだ。

考えて考えて、ようやく俺は電話で秋野さんのお父さんに連絡を取ることを思いついた。

『は？ 近江？ おう、てめえ、ひかりに手紙のことばらしやがったな』

出るなり、相手はぶっさらぼうにいい放った。どうやら、秋野さんは早々に手紙の一件

について、父親に文句をつけたらしい。

『まあ、たまたまあいつが、渡す相手だったからいいなんていいやがったからよかったもの、ヤクソクってのが守れねえのかよ、てめえは』

不機嫌そうな、いらだたしさをぶつける声に、なぜか、少しほっとした。

(この人はまだ俺を俺として扱ってくれる)

「すみません……あの、その、ところで、秋野さん、そちらに行ってますか？」

『ひかり？ いねえよ。何だ、ケンカでもしたのか』

秋野さんのお父さんはうれしそうに言った。

「そうじゃなくて……うまく連絡が取れなくて」

適当な言い訳が見つからず、思わず口ごもったが、相手は不審には思わなかったようだ。

『わはは、そいつあ、見放されたんだよ。あいつはしゃきつとした男がいいんだ、しゃきつとしたな』

あっけらかんと突き放されたが、意外に落ち込まなかった。その声には、どこか親しげ

な、よく知った友人をからかうような響きがあったせいかも知れない。

けれど、秋野さんの行方はわからなかった。

「じゃあ、いいです、はい」

手掛かりのなさにつながりしのが声にでたのだろうか、秋野さんのお父さんは、ふいと口調を和らげた。

『おう、近江、また今度しっかり話をつけような、覚えとけよ、今度こそな』

(近江、か)

今度しっかり話をつけるって、スライムとでも話してくれるんだろうか。

受話器を置いて、立ち上がる。秋野さんの部屋の鍵は持っていた。部屋を出て、自分で

もどうする気なのかわからないまま、大学へ向かう電車に乗った。

(何だか、寒い)

キスは二時に受けている。昼までに見つけられなかったら、この前の二の舞いになって

しまうかもしれない。けれど、今度は誰も助けてくれない、助けてくれようがない、秋野

さん以外には。

ふっと頼りなく、風に巻かれて消えてしまいそうな気がした。

(このままどこかへ消えた方がいいのかな)

電車の外に流れて行く春の景色に、あの山奥の湖の景色が重なって見えた。

あそこで『近江潤』の姿を借りなければ、こんなことにはならなかったのかも知れない。

でも、他にどんな方法があっただろう。

より所のない気持ちはそういう光景を呼ぶのか、居場所を奪われるものばかりを見た。

駅で降りて、大学へ向かう途中で、開店したばかりの店の戸口を掃除していた男が、突

然わめいて手にしていたほうきで、近寄ってきていた猫を叩いた。跳ね上がって悲鳴を上げ

た猫がほうきで逃げた体で逃げるのに、憎々しげに罵倒する。

とろとろと歩いてきた老人が、その進路を横切っていた小さな虫を、まるでそこには何も

いなかったように踏み潰した。

学校に遅れたのか、いらだたしそうに走っている小学生が、通りすがりに咲いていた花

を次々とむしり取り、散らして行く。その紅が、潰された虫の死骸にはらはらとかかる。

それらすべてがまるで自分の行き先を暗示しているようで、俺は無意識に体を抱いた。

大学に入ってまずは部室を、続いて、秋野さんの取りそうな講義のある校舎を見て回っ

ていると、運悪く、この間から俺を追い回している新入生の一団に捕まった。

「近江さあん、おはようございまあす」

「今、お暇ですかあ」

「いや、あの」

「お忙しいかもしれないんですけどお」

二人ぐらいが目を見合わせて、同時に封筒を差し出す。

「近江さん、お電話出て下さらないって聞いたんで、がんばって書いたんですう」

「手紙って書くの、大変なんですよ」

「いや、ごめん、受け取れなくて」

「ひどい、なんて思いません？」

くね、と相手は腰から砕けるように体を振った。両手を組み合わせ、眉を寄せて続ける。

「理由知る権利、あると思いますう」

「理由？」

「何で、秋野さんはよくて、あたし達はだめなんですかあ？」

俺は呆気を取られた。秋野さんの事を知ってて追い回しているなんて思わなかった。

「秋野さんよりずっと若いですし、近江さんに似合うと思うんですけどお」  
「そんなんじゃない」  
ようやく、そう反論できた。続けようとしたとたん、ことばが喉に詰まってしまう。  
「そんなんじゃないんだ、とにかくごめん！」  
「あ、ひどおい！」  
「逃げるなんてひどいですう！」  
必死に女の子達をかきわけて別の校舎に飛び込んだときは、心底疲れ切っていた。  
そんなんじゃない。  
耳の奥に、今自分がいった言葉が繰り返して響いている。  
(秋野さんは『密約』の相手なんだ、ただ一人の)  
そう応えかけて、ふいに聞こえたもう一つの声に、いうべきことばを失ったのだ。  
(そんなんじゃない。確かに俺にとってはそうだけど、秋野さんにとってはどうなんだ?)  
結局は秋野さんにとって、俺は『そんな』ものに過ぎないかもしれないの？  
勢いを付けて駆け上がった階段の踊り場で立ちすくむ。急速に脱力感が襲ってきた。重力に耐えて階段を上り切ることさえできないような気がして、向きを変えてそろそろと段をおり始める。  
そのとたん、  
「近江！」  
声をかけられて、不安定だった足元が支えを失った。転げ落ちそうになって、俺はかろうじて階段の手すりにしがみついた。  
「げ！」  
真後ろでうろたえた声が上がって、がしっと力強い手が肩をつかむ。それで何とか落ちずに済んだものの、とても立っていられなくて、俺はへたへたと階段に座り込んだ。おい、何だよ、危ないだろ、とぼやきながら降りて行く他の学生の中で、荒くなった呼吸を整えようとする。  
「何だよ、いきなり落ちんなよ」  
背後から声をかけた村西は、がらがら声であきれたように言いながら、へたり込んだ俺をのぞき込んだ。  
「どうした、真っ青だぞ」  
「そう、だろうな」  
応えて笑うのが精一杯、くらくと頭を中心が揺れた気がして手すりをしっかり掴み直す。最後のキスから十時間はとうに過ぎた。命を削り取るような残り時間が、実際どれぐらにあるのか、俺にもわからない。  
「風邪か？ それとも」  
村西がにやりと笑った。  
「女遊びのし過ぎか？ 秋野と同居してんだってな」  
からかい口調にも苦笑するしかなかった。  
階段から落ちかけたのが引き金になったのか、足の感覚はみるみる鈍くなってきた。さっきまでは、多少ぶついてもわからない、ぐらいだったのが、今はきちんと地面を踏んでいるのかどうかがあやふやになってきている。  
それは、初めてのキス、『密約』をされたときの感覚にそっくりだった。秋野さんのお父さんの運転するタクシーの中で、あっさりと溶け崩れてしまった足。あのときの、ごん、という無機質な音を思い出す。とても嫌な感覚だ。視界が揺れて吐き気がする。パニックを起こしそうなのをかろうじて抑えている。  
「何があったんだ？ ひょっとして、秋野に振られた、とか……おいおいおいおい」  
ずるずると、今度は階段を数段滑り落ちてしまった俺に、村西はあきれ返ったといったげな声を上げた。  
「派手なりアクションする奴だなあ、そんなに秋野に惚れてんのか？」  
とんとん、と段を降りてきて、身を屈めて俺の腕をつかみ上げ、くすくす笑った。  
「わかったよ、十分わかったからもう立てって。おまえが、こんなに冗談のわかる奴とは思わなかった」  
ふざけてなんかいなかった。体中からエネルギーが抜け落ちていく。『密約』者が側にいないということがこれほど恐怖に拍車をかけるとは思わなかった。ささいな気持ちの揺れが直接体に響いてしまうのがわかる。  
秋野さんが俺を振った、ということばだけで、十分俺にはきつい一撃だったのだ。  
「それじゃあ、秋野が夜中の三時に、男と一緒にいるのを許しちゃならねえな」  
村西が笑いながら続けて、俺は我に返った。  
(秋野さんが、男と一緒にいたって?)  
じゃあ、やっぱり、そうだったんだ、秋野さんはもう俺から離れる気なんだ。  
そうつぶやく胸とは反対に、俺は思わず村西を見返して問い詰めていた。  
「秋野さんを見たのか？」  
「ああ、何だ、少し元気がでたな」  
村西はうなずいて、俺を引っ張り上げて立たせてくれた。  
「誰と居たって？」  
「南大路製紙って会社、知ってるだろ？」  
「南大路？」  
「あいかわらず、世情に疎い奴だな、頭のいい割りには。先月だか、環境破壊企業だって、マスコミのやり玉に上げられてたろ？ ほら、よく妙な情報もって来る宮内が、たいした証拠がないから突っ込みようがねえってぼやいてたじゃないか」  
宮内。その名前には覚えがあった。確か、一度、秋野さんに分厚い封筒が送られてきていた、その差し出し人の名前だったはずだ。  
「で、その、南大路製紙の工場近くで、昨日だか一昨日だか、秋野が男と一緒に居たって聞いたぞ。宮内に聞けば、もう少しわかるかもな」  
「そうか」  
手掛かりがないまま焦っていた数時間に比べれば、あやふやな情報でもありがたかった。  
そう、たとえ、その宮内とやらが、秋野さんの『恋人』だとわかるとしても。  
「助かったよ、宮内って、どこにいたっけ」  
「経済、けど」  
村西は腕時計にちらっと目をやった。  
「もう昼だからな、今の時間なら食堂だろ」  
「サンキュ」  
うなずいて歩き始めた俺が、それでも危うく見えたのだろう、村西は追いかけるように後ろから叫んできた。  
「たまには冷たくしとかねえと、振り回されるだけだぜ、女ってのは」  
(そうだな、きっと、人間なら)

俺は手を振り返してうなずいて見せ、食堂へと急いだ。

昼時の食堂はいやというほど混み合っていた。  
温かな濃いみそ汁のにおい、炊き上がったご飯や、幾種類ものおかずのかおりは、人間にとっては幸福の象徴かもしれない。

けれど、たこ焼き一つがもう食べられなくなっている俺には、それらが、荒れ狂う嵐のような感覚の刺激となって襲いかかってきた。

めまいと吐き気をこらえて、宮内を探しにかかる。  
ここへ来る前に寄った学生課で、顔写真は覚えてきていた。『密約』後の鋭い感覚をうまく使えば、人間達のおふれる大学内からでも見つけることができるはずだ。

だが、それは同時に、ただでさえ消耗している体に、絶えまなく負担をかけること、残ったわずかなエネルギーを激しい勢いで消耗していくことに他ならなかった。

それでも、動かなくては時間がない。  
人間は、自分達と姿形の異なる生物にはとても攻撃的だ。  
ましてや、目鼻も何も無い生物、いくら人間と同じぐらい知性も感情もあると主張しても、海辺にのたくっているナメクジ風の生物には優しくしてくれないだろう。

ただ一人、秋野さんをのぞいては。  
(秋野さん)

大きな目で柔らかく笑う顔を思い出して、頭の奥に封じ込めるように目を閉じた。  
本当に、秋野さんは、もう帰って来ないつもりかもしれない。俺の側を離れて、宇宙人のエネルギー源なんかではなく、当たり前前の学生として、普通の女性として、別の誰かと暮らしたくなったのかも知れない。

俺がこうやって捜し回ることすら、本当は迷惑なのかも知れない。  
もしそうならば、俺は数時間もしないうちに原型に戻り、次にはその形さえ保てなくなって、ぬらぬらと光る粘りのある水になって、どこかの下水に流されていくのだ。そして、やがては海にたどりつく。宇宙から見た地球の半分以上を覆っていた、あの青い世界に飲み込まれていく。

(それでもいいのかも知れない)  
ほんとうは、五年前にそうになっているはずだったんだから、それがたまたま遅れただけなのかもしれない。

疲労感と諦めとが体の力を奪っていく。感覚が見る見る鈍っていくような気がして、俺は自販機のコーナーの隅の壁にもたれた。眼を閉じ、不安定に乱れる呼吸を整える。ひんやりとした冷たい汗が額ににじむのを、そっと拭う。

(それでも)  
ぼんやり目を開くと、世界はまぶしいほどの光に満たされていた。  
未練がましい声がゆっくりとひっそりと、胸の内側でつぶやいている。

(あの秋野さんが俺にそんな酷いことをするはずがない)  
少し前なら、もっと簡単に諦められたかも知れない。  
けれども今は……秋野さんが俺に十分優しくしてくれた今は、どうしても諦められない。  
頬に当てられた温かい手を思い出す。泣き出した俺に唇を合わせて慰めてくれたことも。秋野さんが裏切るはずがない。

(いや)  
なのに、そう思ったまた次の瞬間には、振り回されて疲れた心が首を振った。  
(秋野さんは『密約』がやり直せないのかってきいたじゃないか)

そう、だから、俺は本当は秋野さんを見つけたくないのかも知れない。  
それが真実の答えのような気がして思わず深いため息が出た。  
そうだ。

俺は、秋野さんの裏切りを知りたくない。秋野さんの笑顔を信じていたい。  
もし、できるなら、こうして捜し続けたまま、時間がきて溶けてしまいたいのかも知れない。

ずいぶんと、切ない。  
その気持ちを振り切るように、壁を押して歩き出す。

「う…」  
食堂を二周してから、吐き気がこらえきれずに、俺は外へ出た。

宮内の姿はどこにも見当たらない。  
体が細かく震えているのは、エネルギーを失っていくからだろうか、それとも秋野さんを見つけても、全てはやっぱり終わるのだという予感のせいだろうか。

緑色に鮮やかな芝生の上に座り込むと、我を失って急に叫び出したくなった。  
どこを探せばいいのかわからない。探すことが正しいのかさえわからない。  
俺は秋野さんのことを何にも知らない。

(秋野さんは何も話してくれなかったから)  
言い訳して、すぐに嘘だと気がついた。  
(違う、そうじゃない)

俺も何も聞かなかつた。秋野さんがいつどこへ出掛けようと、キス以外の秋野さんを俺は知ろうとしなかつた。今度のことがなければ、きっとこれからだってそうしただろう。それはきっと、心のどこかで、いつか秋野さんを失うんだと思っていたからだ。

秋野さんがずっと側に居てくれるなんて思っていなかつた。俺にとっては大切な『密約』でも、秋野さんにとっては幻のようなつながりでしかないとわかっていた。秋野さんにとって、俺は恋人でも友人でもなく、単に厄介なお荷物でしかないことも。

(それでもいいと思ってたわけじゃない)  
秋野さんのことを詮索しないことで、いつ秋野さんを失っても傷つかないようにしようとしていただけなのだ。

時計は容赦なく回っていく。貴重な時間をまた失った。急に視界が暗くなった気がして空を仰いだ。確かにさっきよりは雲が増えてきているが、周囲が暗くなるほどじゃない。  
(今度は視力から失うのだろうか)

考えてぞっとした。萎えようとする気力を励まして、何とか立ち上がる。  
動ける間に人目につかない場所に移動しておいた方がいいはずだ。人間達に踏みにじられて最後の時を過ごしたくないならば。

けれど、その最後の時が来る前に、俺は秋野さんに会いたいんだ、と思って辛くなった。  
「近江！」  
立ち上がったとたん、覚えのあるがらがら声が俺を呼んだ。

(村西?)

「おい、近江！」

何かわかったのか、と振り返った矢先、いきなり視界が暗転した。頭に広がった巨大な闇に感覚を飲み尽くされて俺は意識を失った。

「ヴラン！」

暗黒の空間に悲鳴が響く。

「逃げて、ヴラン！」

ああ、また同じ夢だ。楽しいはずの月旅行の果てに迎えた思いもしない結末。

宇宙船の爆発でちりぢりになって吹き飛ぶ父親と、唯一無二の『密約』の相手を失ってしまった母親の悲壮な微笑。

夢の中で何度も父親は細切れになり、母親は宇宙の彼方の船に置き去られる。俺は孤独と無力感に引き裂かれながら、青い地球に落ちていく。

いつまで苦しめばいいんだろう。どこまで傷つけば、この夢は終わりを告げるのか。

いや、もう永遠に終わることなどないのかもしれない。

秋野さんがいない。

そう、『密約』の相手は俺を捨てたんだ…。

「おい、近江、大丈夫か、おい！」  
ゆさゆさと激しく揺さぶられて目が覚めた。  
「ああ、大丈夫だ」  
しわがれた村西の声に目を開いてぎよっとする。辺りが真っ暗だ。目の前には鼻の先まで塗り込められたような黒い空間しかない。  
「村西？」  
「え、おい！」  
体を起こして手を伸ばしたとたんに、がくと体が空に浮いた。支えを失って前にめった体が、どん、と激しく別の物に突き当たる。  
「よせよ、なんだ、危なねえな」  
うろたえた声とともに、ぐっと肩が強く握られ起こされた。  
「何ふざけてんだ？」  
村西は怒ったようにつぶやいた。  
「村西…」  
手で探って相手の腕につかまる。  
「今、夜、じゃないよな？」  
尋ねるまでもなかった。  
いくら夜が来ているにしても、すぐ側にいる相手の顔が見えないはずはない。けれど、必死に目をこらして声の方向を見つめても、見えるのはただただのっぺりとして平板な、広さのわからぬもやもやと黒い空間だけだ。  
「どうしたんだ？ まさか、目が見えないのか？」  
相手の声が不安を帯びた。  
間違いない、今度は視力の方から失ってしまったのだ。  
「ここ、どこだ？」  
俺は、村西に支えられて体を落ち着けると、手で座っている場所の周囲を探った。少し湿り気のある、平らに広がった布の感じ。弾力があって、端っこが丸い。  
(ベッド、か？)  
そういえば、どこかぶんと葉くさい空気が回りに漂っている。  
「大学の保健室……って、覚えてないのか？ 声かけたらいきなり倒れたんだぞ、お前。さっき、あんまりおまえが妙な感じだったんで、こっちは宮内を探してたんだ」  
「宮内？ 今、ここに居るのか？」  
「いない。けど、秋野のことはわかったぜ」  
とくん、と心臓が跳ねた気がした。  
「何でも、秋野に仕事を回したんだそう。秋野の方から、環境保護関係の仕事がないかって尋ねてきたらしい。まあ、宮内はバイト情報には詳しいからな」  
(環境保護？)  
俺は眉を寄せた。秋野さんがそんなことに興味を持っているとは知らなかった。  
「で、一つあったから、秋野に頼んだそう。えーと、まてよ」  
俺を無理やりベッドに押し込み横にさせてから、村西はがさがさと何枚かの紙をめくるとような音をさせた。  
「南大路製紙の環境問題に関する情報について、か。はあ、これだな。うん、昼間は流せないような廃棄物を夜中に流してるらしいってのか。その証拠集めをするっていうのがバイト内容らしいな」  
村西は警戒するように声を低めた。  
「確かにそりゃ、これならいい稼ぎだろうけど、宮内のやつ、無茶してやがるな、見つけられなくても、やばいぞ、これ」  
体の奥の柔らかい部分、そこまで堅くて鋭い長い針が突き刺されたような気がした。  
「おい、待てよ」  
ベッドを降りようとした俺に、村西があわてた声を出して、腕をつかむ。  
「見えねえんだろ、何する気だよ」  
「秋野さんが帰ってこない。何かあったんだ」  
一瞬広がったかすかな安堵はすぐに恐怖に取って変わった。  
もし、南大路製紙で秋野さんに何かあったのなら、彼女は俺を捨てたことにはならない。けれど、それは秋野さんの命の危険を意味していることになる。  
(それが俺の望んでいることなのか？)  
もし、秋野さんが昨日は違う奴とデートしていただけなら、彼女は無事だ。そして、俺は遠からず秋野さんに振られて、どぶ川に流れていくことになる。  
(だけど、それだけのこと、だ)  
どちらがいい？ どちらが楽だ？  
(簡単なことじゃないか)  
この数時間、俺は何を迷っていたんだろう。しばみ切っていた体に、秋野さんのキスを受けたみたいなのが戻って来る気がした。  
「ああ、まあそうだろうけどよ、こら、待って。今のおまえに何ができるって言うんだ」  
村西がいらだった声で制して、再び俺は凍りついた。  
確かに、視力を失って、こうしてただ座っているだけでもエネルギーを削り取られて動けなくなっていく俺が、どうすれば秋野さんを助けられるというんだろう。自分一人を扱いかねているっていうの？  
「わかった」  
村西がやれやれといった様子で息を吐いた。  
「こうなったら仕方ねえ、付いて行ってやるから待てる。目が見えねえことがわかったら、ここから出してもらえねえから、おとなしくしてるよ。おまえを連れ出していいか、聞いてきてやるから」  
「村西？」  
「何だ？」  
がさがさと辺りを片付けにかかっている相手に尋ねる。  
「今、何時だ？」  
「今？ えーと、一時すぎだ。いいか」  
戸口へ遠ざかりかけた声は警戒するように戻ってきた。  
「待てるよ、動くなよ」

「遅い」

俺のつぶやきは再び遠ざかった村西には届かなかったようだ。どっぴりとした重い絶望感が胸の中を塗りつぶしていく。

もう一時。エネルギーが持つのはたぶんもう一時間もないだろう。

なのに、俺は秋野さんを助けに行くどころか、このベッドからも動けもしない。秋野さんに今何かあったとしても何もできない。あの月旅行で両親を失ったみたいに、今度は秋野さんを失うんだ。

(それでもいいじゃないか)

また、疲れ切った声が出た。

(後、一時間もすれば、秋野さんが無事だろうとそうでなかろうと、おまえは溶けてなくなるんだ。今回のことがなくても、秋野さんはいずれお前を捨てただろう。おまえは秋野さんにとって厄介な荷物、エネルギーを吸い取る寄生虫のようなものなんだから。それが少し早くなっただけのことじゃないか)

『近江!』

目の中の闇に秋野さんの笑顔が突然弾けた。

『文句つけたら、縮んでくれる?』

『おいしいものを食べたら、ちゃんとごちそうさまっというんだよ』

からかうような、それでも優しい、秋野さんのほほえみ。

(やっぱりいやだ)

ふいに強くはつきりと思った。

秋野さんが俺のことをどう思ってもいい。この後、俺を捨ててもいい。けれど。

(俺は秋野さんを捨てたくない。秋野さんは失いたくないんだ)

ともすれば崩れそうな体を必死に保って起き上がった俺は、かすかな音に気がついた。

ぱらぱらぱら。

窓が開いているのだろう、その向こうから聞こえて来る、木々や地面を打つ柔らかくて丸い音。いつの間にか雨が降り始めている。

雨。

曇った灰色の空から、ついに自分の重さに耐え切れなくなって落ちて来る、水の粒。

震えとともに直感のようなものが俺の中を走り抜けた。

俺は手探りでベッドの端を探し、ずり落ちないように用心深く足を降ろした。ふやりと足が崩れて転びそうになったが何とかこらえて、ベッドを触りながらじりじりと回り、窓の方へ、雨の音が強くなる方へ進んで行く。

ベッドから机か何かに、そして、壁に。手を滑らせながら、辺りを探りながら歩いて行く途中で、左足を引き留めるものがあつた。右へ左へと足を滑らせて回って行こうとしたが、それはどう置かれていたものなのか、うまく避けられない。焦って強引に踏み込むと、左足のふくらみはぎに鋭い痛みが走って、いきなり足の一部がもぎ取られた。

びしゃ。

人の体にしてはあまりにも異様な音をたてて、俺の体が床に散った。倒れかけてとっさに窓枠にしがみつき、何とか窓へと体を引き寄せる。

思った通り、窓は開いていた。湿った風が吹き込み、雨のにおいが俺を包む。

俺はゆっくり深呼吸をした。

保健室は確か一階の中庭に面した場所にあつたはずだ。中庭は校舎まわりを囲む芝生とは違って、校舎の間を隔てる通路のようなこじんまりした作りになっている空間で、見事な花壇があるわけでもなく、学生も教師もたまに通り返して行くぐらいだ。ましてやこの雨の日、保健室の窓が開いているからなんて、じっと見ている物好きなどいないだろう。

俺は気持ちを決めた。窓枠にのしかかるように体重を移動させ、バランスを保ちながら上半身を外へ乗り出す。そのまま、両手を挙げてだらりと窓の外へ体を倒した。

ぱちぱちぱちぱち。

きつくなってくる雨が、冷たく激しく体を打ってくる。その、体を打つ水、の感覚に意識を集中して一体化し、身を委ね、まず手の形を保っていた意識の膜を切った。

ぶつん。

そんな音が指先でしたような気がした。夜店で打っている水風船が圧力に弾けて、中の水が一気に外へ飛び出すように、両手が弾けて形を失い散り広がるのがわかつた。水とは違って、俺はもう少し粘度がある液体だから、弾けた中身はとろけてとろけてと壁を伝って流れ落ちていく。

同時に、目や耳といった五感に制限し頼っていた感覚が、全身に広がった。周囲の状況が目隠しを取り去られたみたいに明確に『見える』。いや、五感とは違った、もう少し相互に感覚が関連して理解できる、全体的な知覚といった方がいいのかもしれない。意識の焦点の合わせ方次第で、『体』が触れているところならどこでも、見ることも触ることも聞くこともできる。

それはずいぶんと忘れていた解放感だつた。

手から腕へ肩へ首へ胸へ下半身へ。次々に意識の膜を切り離しながら、俺は窓の外へゆるやかに流れ出していく。

ひゃあう、と妙にかすれた悲鳴が背後で聞こえた。

(あつつ)

壁を伝いおり、地面にたどり着いて、なおもゆっくり移動していきながら、俺は思わず

うめいた。

考えていた以上に不愉快な感触だった。

何だか、自分の肌に直接砂利だの石だのをこすりつけられている感じ。雨のせいで多少は楽なのかも知れないが、過敏になっている感覚をおろし金のようなささくれたもので擦りおろしていくようだ。

それは、できるだけ人目につかないように薄く平たい状態になって、物陰から物陰へと流れて行こうとするせいかもしれなかった。

大学を出て、雨に濡れている道を幸いに速度を上げ、裏道へと入っていく。と、いきなり野良犬にほえられて驚いた。

ぐ、うわん、うわん、と、首の辺りの毛を逆立て、野良犬は全身を硬直させて怯えて吠えている。目は血走って俺を凝視し、今にも飛びかかってきそうだ。

(何がそんなに怖いんだ?)

襲われそうな気配に動くこともできなくなって、俺は混乱して考えた。

野良犬の体は震えている。できればここから逃げ出したい、そんな感覚のようなものが濡れた地面を伝わってきた。

同じことを考えている。俺を見て、恐怖に脅えているのだ。

野良犬の眼をじっと見返して、ようやく俺は気がついた。

あまり擦りつけられる感覚が痛かったから、つい体をかばったのだろう。俺はいつの間にか、体の下にあるさまざまなものを巻き込むようにして膨れ上がり、ゴミ用ポリバケツ一杯分もありそうな、うごめく青黒い巨大スライムになりつつあったのだ。

慌てて意識を散らし、巻き込んだものを体の外へ押し出しながら、のたのたその場から逃げ去る。

野良犬はもう近づくのさえ恐ろしかったのだろう、吠えるだけで追っては来なかった。

人間に出くわしていたら事だった。いくら雨が降っていて視界がかすんでいるとはいえ、子どもぐらいのねとねとした青い塊が、なめくじのような光る筋を残しながら移動して行くのを目にしては、今の野良犬どころじゃない、もっと派手な騒ぎになっていただろう。

不要物を押し出しながら、同時に体のいくらかも失い、ようよう道路の端の溝に雨水と一緒に流れ込んだ。

ひどい臭い、ひどい場所だった。

水の流れ自体がずいぶん長く滞っていたのだろう、ねっとり半分腐っているようだ。まとわりつくようなぬるぬるした感触、そして、むかつくような特殊な溶剤が何かを思わせる酸味の強い臭いが満ちている。

流れ込んで来る雨水に僅かに動きを取り戻した水は、俺をのろのろと先へ押しに行く。

溝のあちこちにたまっていたガムの包み紙や泥、べったりした金属臭の強い油のような塊が俺に押し寄せ、体の中に入り込んでくようとする。

不愉快な臭いと得体の知れない腐敗物に、感覚も体も侵されて飲み込まれていきそうだ。

(くそ)

俺は必死に感覚と体を周囲のものから切り離そうとした。不快な刺激から自分を守ろうと体の密度を上げ、粘度を高めて丸くなる。だが、そうすると、より固体に近くなって、雨水程度のゆるやかな流れでは溝の中を移動できなくなるのがわかった。

溝はところどころ蓋が外れていて、地上の道から中が見える。もし、晴れていたなら、この辺りをうろうろしている子ども達に見つかって、棒みたいなのでつつき回され、死ぬまでおもちゃにされたかも知れない。

なんだかふと、『浦島太郎』の話思い出してしまった。

あれも意外と亀そのものが宇宙人だったのかもしれない。

もう一つ、周囲から自分を遮断してしまうと困ったことがあるのがわかった。

回りの不快な刺激から感覚を切り離すに従って、それまでどこへいけばいいか何となく感じていたもの、例の直感のようなものが薄れていくのがわかったのだ。

急いで再び周囲の汚濁の中に自分の体と感覚をさらしながら、俺はその新しい感覚がどこから生まれているのか理解した。

水だ。

この地球では、水は何ものにも勝る巨大で豊かな情報源なのだ。

水の中には、自然に起こっている現象はもちろん、人間達がどのような生活を営んできたか、営みつつあるのが全て記録されていた。地球上にある全ての物質の記録、それだけではない、その物質がどのような経過をたどってここまで来たのかの記録、水に触れていたものや命の蓄えていた感情や感覚まで含まれている。

それは、この地球の過去から未来を含む時間そのものといってもよかった。

俺は本体になって雨に打たれながら、いつの間にか、自分の感覚をこの『水の記憶』に共振させて情報を受け取り、秋野さんを追い始めていたのだ。

気づいた俺は、改めて、もう一度、流れ込んで来る雨を媒体に、溝の中を通り過ぎたものから、南大路製紙工場とその近辺についての情報を意識的に検索し始めた。

南大路製紙の所在地。そこに工場が建設された経過と稼働し始めてからの歴史。現在の状況。そこに出入りしている物や人の動きと流れ。それらにくっついておぼろげな感情と思考。それらを丁寧に追いかけていく。

あった。

その中に、一週間に二回、南大路製紙工場の裏、排水口近くのどぶ川べりで、真夜中二時から三時まで、カメラを手にしてじっと潜んでいた秋野さんの情報も含まれていた。

(秋野さん)

俺は秋野さんに意識を集めた。暗い夜の川の側で、体を緊張させてうずくまっている秋野さんの姿が、ゆっくりと見えてくる。

秋野さんは焦っていた。

宮内に頼まれている仕事に必要な、十分な写真が撮れなかったからだ。いらいらとして川べりの草を引き抜き、小石を落としたりしている。ゆるゆると流れている川の水は、彼女が放っている不安といらだちを感じ取り記憶していた。

そんな夜が何日も続き、昨夜初めて、秋野さんは、南大路製紙工場の排水口から流された不気味な臭いと色の液体を、カメラにおさめることができたのだ。

けれど、そうやって、何週間も粘っていた秋野さんは目立ち過ぎた。意気揚々と帰ろうとしたところを、いつの間にか工場から出てきた作業服を着た男と、背広姿の険しい顔の男に呼び止められたのだ。

『こんな夜に、こんなところで何をしてるんだ。ここは、うちの会社の敷地内だぞ』  
『知らなかったのよ。夜中にしか動かない特殊な昆虫の研究をしてるの。その昆虫が、この辺りじゃ、ここにしかいないのよ。その虫の生態を記録してるってわけ』

『虫だけじゃないんじゃないか、そのカメラに写ってるのは』

男達は秋野さんの話に納得しなかった。

『詳しい話を聞きたいんだ。警察に届けてもいいんだぞ、不法侵入で。だが、まず話を聞こう、こっちへ来い』

両腕を二人の男に掴まれて、秋野さんはうなだれた。青くなってかすかに震えてもいた。その縮み上がっていくような恐怖を、俺も感覚を通じて感じ取った。

そのまま秋野さんは工場の中へ連れ込まれてしまった。そして、その後秋野さんは外へは出ていない。

まだ工場のどこかにいるのだ。

秋野さんの死亡を伝える情報がないだけが救いだった。

俺は溝の中を、南大路製紙に向かって再び移動し始めた。やがて、単に水の情報からだけではなく、俺の体としても、問題の場所に近づいているという感じが強くなった。

何か、特殊な臭いのするもの、それまでの町中に流れていたものとは全く違うものが、この溝を流されたことがある。今は流れていないが、溝の壁についたわずかな水滴が、俺の体にその情報を伝えてくれたのだ。

南大路製紙は間違いなく不正な行為を繰り返している。そして、秋野さんはその証拠をしっかりと握ってしまった。南大路製紙が、彼女を無事に返すとはとても思えない。今度こそ、本当に秋野さんを失ってしまうかもしれない。

ひやっとした感覚が体の隅々にまで衝撃になって走った。  
(そんなことには絶対させない)  
できるかぎり速度をあげ、その特殊な臭いのする液体の感覚を頼りに流れていく。  
気がつくと、もう、すぐ近くに南大路製紙工場の排水口の一つがあった。

(っ！)  
そのあたりはひどい状態だった。これまでとは比較にならない、ちりちりと体を蝕み傷めつけてくるものが含まれた水が排水口の周囲と溝に向かって流れた水の跡に残っている。

それは、その場にじっと止まって、この先に秋野さんのいる場所があるのかどうか探っているかと数秒おきに体の位置を変えなくてはならないほど、痛みを伴った感覚だった。それだけでなく、障害物が多く水の少ない溝を急いで移動してきたせいで、俺の体はずいぶん減ってつながりを失い、おまけに脆く弱くなってしまっている。

かといって、この周囲の水を体に取り込めば、それこそ水に含まれた毒素に内側から侵され、じわじわ体の細胞一つ一つが壊されていくだろう。

時計は見られないけど、タイムリミットまでそう時間が残されてはいないはずだ。覚悟を決めて伸び上がり、特殊な液体にぬれた壁面をはい上り、排水口から逆に工場内へ侵入していく。

とがった刺の上を移動するような痛みが全身に広がった。液体が流れた壁面に触れているだけで、これほど苦痛を感じるなら、夜中で例の液体が流されているときにここへ飛び込んでいたら、きっと無事にはすまなかったはずだ。

少し先の方で、水路は細いパイプと太くて大きな管に分かれていた。周囲の情報からでは、どちらも南大路製紙工場に続いているはずだが、同じ場所につながっているかはわからない。少しでも秋野さんに近い場所の水路へ向かうとして、俺は体を細く延ばし、まず細いパイプの方から探りにかかった。

(っ！)  
次の瞬間、体が無理やり引きちぎられた気がして意識が弾け飛び、目の前が白銀から暗転した。体中の細胞が内側に引き縮まって身動きできなくなる。

(何、だ？)  
よく焼けた鉄板にむりやり指先を押しつけられたような感じ、といった方がいいかもしれない。じゅう、という音さえ聞こえたような気がする。しかもそこから動けない。そのまま数秒、感覚が戻って来ると、激痛も触手の端から走り上がってきて、無意識に体が震えた。

そろそろと、延ばした触手を引っ込めようとしたが、先端がこわばって曲がってもくれない。痛み以外の感覚は鈍く干からびていて、自分の体だという感じさえない。引きずるように手繰り寄せるのも一苦労だった。

細胞がかなり死んでしまったのだろう。体を擦りつけていった壁に、表皮がかさかさした青色の筋になって剥がれて張りついているのを、俺は凍りつくような思いで見つめた。

きっと、この細いパイプから特殊な廃液が流され、太い管からは普通の水が出されて、液の濃度を下けているのだ。そうして薄められた液体だけが排水口から出されて溝を伝い、川に流されていくから、目立った被害を起こさないというわけだろう。

けれども、その薄められているはずの排水さえ、あらゆる命を奪うものだということは、ほかならぬ俺自身の体でわかる。濃度の高い廃液の方を探った体は完全に感覚を失っているし、じっとしていると、その侵されて死んでしまっているはずの触手の部分から、じわじわとどす黒い澱みのような汚染が広がってくるのが感じられる。

俺は急いで大きな管の方へ入り込んだ。まさか、さすがに昼日中から危険な廃液を流すほどばかじゃないとは思いますが、万が一、それを全身に浴びるようなことになったら、俺は確実に死ぬだろう。

管にはわずかに水が流れている。その水を伝ってとりあえず工場内へ入り込んでいく。管は廃液を流しているパイプと平行して工場の奥へ奥へと走っていた。どうやら、表からは見えない、正規の建物とは別に建てられている独立した棟が一つ、あるようだ。そこでは、認可されていない特殊な溶剤が触媒を使っているようで、出入りしている人間の数も種類も限られている。

奥へ入るに従って、太い管は分岐し始めた。どの管からもいろいろな気配の水が少しずつ流れてきている。

俺は分岐のたびに止まって、水の流れに含まれている情報を読み取った。ほんのわずかなものでも見逃すまいと意識を散らせて触手を延ばすが、まだ秋野さんの居る場所の情報は入ってこない。

さっきの衝撃で体がまだ凍っていたし、あまり遠くまで体を延ばすと、水に流され散ってしまう可能性もあった。

(本当に、この方法で秋野さんを見つけられるのだろうか)  
秋野さんが追いかけてたのは、たぶん、この別棟からの廃液だろうから、それを頼りにすればいいと思いつつ焦りがつってくる。

(それにも、秋野さんに会えたとしても、人間形態に戻るほど体が残ってるのだろうか)

分岐を越えるたびに、俺の体は確実に減っていった。意識を広げきれない部分が管のあちこちにわずかずつだが削り落とされていきつつあるのだ。

ずき、ずき、とその度ごとに喪失を知らせる痛みの信号が駆け上がってくるのだが、その痛みにもだんだん慣れていきつつあって、それが一層体を失うのに拍車をかけていた。

スライムだからわからないが、もし、人間形態なら、満身創痍というところか。

(今の俺のままでも、秋野さんはキス、してくれるだろうけど)

スライムの俺は秋野さんを助けられるのだろうか。

いや、あちこちの溝や管を通過してどろどろに汚れた俺を、秋野さんは本当に拒まないだろうか。

俺は想像上の頭を振った。

(そんなこと、今考えても仕方ない)

助けろって決めたんだ、と自分に言い聞かせて、気力を奮い起こす。

時間がない。

俺にとってはもちろんだけど、たぶん、ここまで巧みに執ように世間から隠してやっていることだから、工場側は秋野さんも明日まで生かしておいてはくれないだろう。夜になれば、秋野さんも処理をされて、あの排水口から流されてしまうかもしれない。

考え込んでいた俺は、突然流れてきた水に驚いた。

かなりの水量がいきなり管の中にあふれ、とっさに周囲の壁に張りついて何とか流されることを避けたものの、引き寄せ損なった体の一部をちぎられてもっていかれ、意識も引き裂かれたようにくらくらした。

(廃液を薄める以外にも、この管を水が流れることがあるんだ)

無意識にその水の情報を探って、体が軽く跳ね上がった。

(秋野さんだ！)

秋野さんの気配がある。ひどく遠いけど、まぎれもなく秋野さんの柔らかなエネルギーの波が感じられる。

俺は、その管に体を滑り込ませた。

管はこれまでのよりも細くなっている。うねうねとしたその水路を追いかけていくと、ふいにシャンプーや石鹼のにおいが強く漂う場所に出た。周囲を探って、そこが従業員用の風呂場だと知る。奥にある施設で働いた後、ここで体を洗って表に出て行くことになっているのだろう。今使われたばかりらしく、水色と白のタイルは濡れて、生温かな水が広がっている。

(なるほどな)

俺は納得した。おそらく、こうした生活排水で有害な廃液を薄めて流しているのだ。いくら工場施設を隠しても、廃液を薄めるためには相当量の水を必要とするはず、それをどうしてごまかしているのだろうと思っていたが、このやり方ならば、分岐している管の先々にある施設の生活排水から集めた水を二次利用できる。

(ここからはどうしよう)

不安になった瞬間、体に触れていた水が触媒のように働いて、『秋野さん』の存在をキーワードに、さっきまで入浴していた男の情報を教えてくれた。

実は、その男こそ、秋野さんをつかまえて工場内へ連れ込んだ男の一人、作業服の男だったのだ。

男は、氷川退蔵、といった。四十六歳。大都市から離れた小さな街からやってきた。表向きは南大路製紙のパート作業員だが、本当は裏の施設で働いていて、もう十年そこそこになる。使っている溶剤のせいかな、最近体の調子が悪くて、ここにいるのもそろそろ潮時かもしれないと考えながら入浴していた。

氷川が秋野さんを見つけたのは偶然だ。一番面倒な廃液処理を終えて、夜食でも買いに行こうと、工場裏手の細い専用通路から出ようとしたら、川べりに秋野さんがうずくまっていたのだ。

実は、秋野さんを見たのは初めてではなくて、前にも一度、おかしなところにおかしな人間がいる、と気にはしていた。どう見ても大学生かそこら、友達と待ち合わせている雰囲気でも場所でもない。夜目に目立たない格好をしているのも引掛かった。

一回目に見かけたのはこの風呂場からで、そのときは、後ろ暗いことをしているからだ。自分を納得させたが、今度は二回目、偶然にしてはおかしすぎる。

表から回って夜食を買って戻り、担当の石崎に報告すると、いつものように、これだから学のない男は、とか文句をいわれた。だが、石崎も、氷川が秋野さんを見かけたのが排水口の辺りで、しかも今夜で二度目だと知ると、対応をがらりと変えた。

『始末してしまおう』と言い出したのは、石崎のほうだ。

氷川は怯んだ。

秋野さんが、彼の仕送りを待つ、故郷にいる娘と同じくらいだとわかったからだ。

けれど、わしはここでしか働けないから、そうするしかないんだ、と氷川は考えていた。そうするしか、というの、今夜、秋野さんの首を締めてしまおうということだ。

俺は必死に、氷川が水に残したその先の感情を拾おうとした。けれど、それが一番強くはっきりした感情で、後は、秋野さんが、この同じ棟のどこかに監禁されていることぐらいしかわからない。

氷川は、そのことについてはもう本当に考えなくなかったのだろう。秋野さんがどこに居るのかさえ、『そのとき』までは考えるまいとして、入浴を終えている。

『そのとき』は、仮眠を終えた氷川が目覚めたとき、夕方の終業サイレンが鳴り終わって、人の気配が消えたとき、と決めたようだ。

俺は、氷川の感情の中でちりりと一瞬『見えた』秋野さんの映像を細かく分析しながら、蛇口に擦り寄っていった。体を延ばし、蛇口に満ちている水に触れ、今得たばかりの情報を水に広げる。もし、その部屋に水道があれば、この蛇口を伝っていけるはずだ。

答えは意外に早く見つかった。

秋野さんが閉じ込められている部屋は、一般従業員は近づかない奥まった倉庫だ。秋野さんは昨夜押し込められて、今もそこにいる。

俺は蛇口から体を突っ込んだ。体を薄く柔らかくにして、水の間へ滑り込ませていく。俺の体が水道の中へ入り込んでいくに従って、あふれた水ががぶつ、がぶつと蛇口から零れた。風呂場のこたしは、ついさっきまで人が入っていたのだから、気にする人間は少ないだろう。水道には水が一杯に詰まっている。それと同じに、情報も一杯に詰まっていた。

南大路製紙が特殊な溶剤を使って作っている紙製品は、発色がよくて丈夫なものとして知られていた。おまけに、それは、南大路製紙が総力を挙げて開発した、環境に優しいリサイクル製品だということになっていることもわかった。

この商品のお陰で、南大路製紙の社会的信用も株も上がり、業界では密かに内部抗争が始まりつつあることもわかった。宮内が秋野さんに回したバイトも、意外と同業者からの調査依頼だったのかもしれない。

それは、秋野さんが、決して外に生かして出してはならない類の人間だということも意味している。

俺はおも速度を上げた。少しずつ、少しずつ、秋野さんに近づいている。少しずつ少しずつ、秋野さんの柔らかな波動が濃くなる水が増えてくる。

人の発するエネルギーがこれほど水に記憶されていることを人間が知ったのなら、そうそうむやみやたらと荒い気持ちで水に近づけないはずだ。

秋野さんの閉じ込められている倉庫の隣には、掃除用に小さな洗面所が設置されていた。その水道は古くて締まりが悪いために、ぼたぼたと常にわずかな水が漏れている。

俺はそこまでようやくどり着いた。

半端に開いた管の中を抜け、水と一緒に蛇口の先から伝い降りる。

銀色の管の先からつるつると滴り落ちていくコバルト・ブルーの液体を見ていたものがいれば、そいつはしばらく悪夢にうなされたことだろう。俺はまっすぐに体を延ばしていきながら、そのまま排水口には落ち込まず、途中でうねうねと体をひねって進路を変えて洗面所の壁にへばりつき、残った体を蛇口から引っ張り出しながら、床へと這い降りていったのだから。

洗面所の下に置かれていたバケツの横を抜け、壁際に沿ってとろとろと移動し、倉庫のドアにたどり着く。ドアの下にはわずかだけ透き間があった。そこから中へ滑り込もうとした矢先、人の話し声がして、床と壁の間に細長く張りついたまま、俺は動きを止めた。

「まだ、始末してねえのか」

「けれど、石崎さん」

野太い声に、困り切った弱々しい声が反論している。

「まだ昼間だし、声でも出されちゃことだし」

「こっちに誰が来るっていうんだ、ええ？」

廊下の向こうから、二人の男が歩いてきた。一人は紺色の背広姿に岩のようなしかめっ面の男、もう一人は、灰色でくたびれた作業服を着た土色の顔の男。

石崎と氷川だ。

「けど、何も殺さなくても」

「ばかか、おまえは」

氷川のことばに、石崎は呆れたように言い放った。

「見ただろ、あのガキのカメラ？ 排水口を撮ってやがった。近ごろのガキは金次第でどこへでも転ぶからな、黙らせておくにかぎるのよ」

「でも、じゃあ、わしでなくても」

「ばかだろ、おまえ。他に誰が手があいてる？ ろくすっぽ働けねえおまえを雇ったのは、こういうときのためじゃねえのかよ」

氷川は顔をゆがめて、目を逸らせた。

「日ごろの恩に報いようって気にはならねえのかよ」

石崎は好き放題にいつて、鼻にしわを寄せ、猛々しい笑いを浮かべて立ち止まる。

「まったく、真っ昼間から風呂なんか入れるのは、誰のおかげだと思ってるんだ、ああ？」  
氷川も恨めしそうな顔になって止まる。  
「ほらよ、今なら逆に誰も来ねえ。表で立ってて見てやるから今のうちに始末しちまえ」  
俺は壁際に張りついたまま、忙しく思考を巡らせた。  
このままだと、秋野さんは俺の目の前で奴らに殺されてしまう。なのに、長い間管を伝  
ってきたせいで、俺の体はもう片手さえ再現できないほどに減ってしまっている。今すぐ  
にドアの透き間から忍び込んで、中にいる秋野さんに危険だけでも知らせるしかない。  
悲壮な決意を固めた瞬間、  
「石崎さあん。こっちにいらっしゃいますかあ」  
間の抜けた呼び声が廊下の彼方から響いた。  
「おう」  
石崎がうっとうしそうに振り返る。氷川が露骨にほっとした顔になって、体の力を抜く  
のがわかった。  
「わかった、行くよ」  
石崎は鋭い舌打ちをして、向きを変えた。じろりと目を逸らせたままの氷川をねめつけ、  
憎々しげにつぶやく。  
「氷川あ、そら見ろ、おまえがぐずぐずしてっから」  
半端なところで声がかかったせいで、氷川は気持ちを通すことに決めたらしい。  
「わしは、今は、しません」  
低い声で、それでも氷川はきっぱりといい返した。  
「けっ」  
石崎は吐き捨てるような声を出して、これみよがしに氷川を見た。  
「行くぞ、くず」  
ゆっくりと両肩を揺すりながら遠ざかっていく石崎の後ろから、影のように氷川が付き  
従って行く。  
俺は体中の緊張を解いた。気持ちの上だけでなく、体を張りつかせておくための緊張も  
解けて一気に感覚がふわふわと頼りなくなってしまう、そのまま気を失いそうな気がした。  
のんびりしてはいられない。これ以上の邪魔がはいらないうちに、とドアの透き間から  
ずるずると体の中へ押し込んで行く。

倉庫の中は廊下よりもなおひんやりとして薄暗かった。廃液と同じ刺激臭が漂っている。小さな窓が正面に一つだけあって、そこから外の光が入り、倉庫の中に埃の通路を浮き上がらせていた。六畳ほどもない小さな部屋だ。窓を挟んだ左右の壁は、何列か無理に押し込まれたようなスチールの棚が並んでいて、棚にはぎっちりダンボール箱が詰め込まれている。それらの箱も古びていて変色し、形が崩れたものが多かった。人の気配がほとんどなく、ひょっとして、部屋を間違っただのかと俺はどきとした。だが、しばらく感覚を広げていると、正面の窓の下、棚に入り切らないダンボール箱が積まれた狭苦しい空間に、小さな姿がうずくまっているのがわかった。

(間違いない、秋野さんだ)  
弱ってはいるけど、秋野さん特有のほっとするようなエネルギーを感じて、俺は急いで移動し始めた。ゴミと埃だらけの床を、もうためらうことなく、それらをかき集めながら、人影の側に寄っていく。

部屋の暗さに感覚が慣れてくると、人影ははっきりとした輪郭になって浮かび上がった。秋野さんは目を閉じて、まだ俺の気配には気づいていなかった。ぐったりと壁と箱の間に挟まれるようにもたれている。両手は後ろで縛られているみたいで、口に茶色の梱包用テープが張られている。薄汚れた頬は青ざめ、ひどく疲れているみたいで、目の下にめったにできない微かな隈ができていた。

カメラは取り上げられたままなのか、持っていない。

「秋野さん」

俺はそっと声を出した。秋野さんはびくっとして顔を上げ、目を開けてきょろきょろした。見かけのわりには、秋野さんの目は光も覇気も失っていない。

「秋野さん」

体が減った分、声がうまく出せなかったのだろうか、秋野さんは壁や棚を見回している。俺は体を集めて凝縮させ、音が響くように中空を作って、再び呼びかけた。秋野さんはなおもあちこちを見回した後、床に落ちた小さな四角い光の中に出て行った俺に気がついてくれた。目が大きく開かれて、もごもごも、と何かをつぶやく。

「ごめんね、遅くなって」

移動に体を使っているために不明瞭になってしまう声を、何とか保とうとしながら、俺はいそいそと近寄った。

「今、手とか自由にするからね」

秋野さんがゆっくりとためらいがちにうなずいて、俺は秋野さんの前へ伸ばした足にたどりついた。スニーカーからジーンズの上へとはいしり始める。

「む！」

突然、秋野さんが鋭い声を上げて、体を強ばらせ、俺はぎょっとした。背後から、やっぱり気を変えた氷川かしばれを切らした石崎でも来たのだろうか、慌ててドアの方を感覚で探る。

大丈夫、ドアは開いていないし、廊下の方にも誰も来ていないようだ。

「大丈夫だよ、秋野さん、今なら逃げられ……秋野さん？」

話しかけながら、再び秋野さんの足を上るうとして気がついた。

秋野さんが強ばった、凍りついた表情で見ているのは、ドアや人間の影じゃない。秋野さんの大きな目が警戒心を満たして凝視しているのは、ほかでもない、秋野さんの足の上にねったりと乗っている俺そのものだ。

眉をしかめ、目を見開き、じっと俺を見つめているその顔はとても不安そうに、いぶかしげに見えた。

「秋野さん……」

呼びかけると、ひくっと体の下の秋野さんの足が脅えたように震えた気がした。

「俺……」

近江だよ、といいかけたことばが、体の表面で蒸発していった。

秋野さんと暮らし出してから、秋野さんが夜中のバイトを始めてから、『近江潤』の存在と秋野さんの思いを知ってから、そして、行方不明になってしまった秋野さんを追いかけて来た間、ずっとわかっていたけど見ないようにしていた問いかけが、いきなり目の前を遮った気がした。

秋野さんは俺を必要としないんじゃないか。俺は秋野さんにとって迷惑なんじゃないか。

本当は…本当は。

(秋野さんが必要なのは『近江潤』で、こんなスライムじゃないんだ)

唐突にそう思った。

秋野さんは、こんな状態の俺に助けられるなんて、いやなんだ。

そう、だよな。

抵抗する気持ちが沸き上がるよりも先に、残酷なほどはっきりと納得してしまった。

本当なら、こういふときに助けに来るのは、白馬の王子と相場が決まっている。

ここが汚れた倉庫で、悪者が環境破壊企業ならば、せめてびしっとした精悍な映画スターというところで、断じて、汚れて悪臭を放っている、埃まみれのスライムなんかじゃないはずだ。

(俺は何をしに来たんだ)

秋野さんを助けるために、何とか適応して生き延びて来た世界を放り捨ててまで。汚い溝をはいずり回り、ずたずたになって体を失いながら。

くたくたと力が抜けて、なにもかもが空しくなって、秋野さんの足から滑り落ちてしまっただろう。床に広がり細切れになったら、きっともう一度元には戻れないだろう。

けれど、それでも、それはきっと、秋野さんにとっても、いや、この世界にとってさえ、何の意味もないことなんだろう。

俺はこの世界のものじゃなかったから。

俺は体を固くしたまま俺を見つめている秋野さんを見返した。

(それでも)

それでも、失いたくなかったのは俺の方。

泣き出しそうな気持ちで思った。

故郷の『密約』相手同士でも、地球人のカップルでもなかったんだから、本当は、秋野さんとどうして二人で生きていくかを話し合ったり考えたりしなくちゃいけなかったんだ

ろう。  
けれど、そんなこと必要ないと思っていた。大丈夫だって言い聞かせていた。  
起こってくる問題を見ないままではいられなかったのに、ずっと自分をごまかしていた。  
見てしまえば、そこにどれだけ微かな糸しか繋がっていないのか、わかってしまうから。  
秋野さんと離れる可能性を考えなかったのは俺の方。  
俺さえ気づかないふりをしていれば、いつかは全てうまく行くような気がしていた。一  
生懸命想っていれば、いつかは幻だって真実のつながりになるような気がしていた。  
壊れることがわかっていて、ガラス細工のような『密約』。  
その夢が今ここで、砕けて解けてちぎれていく。  
なのに、ひどい。  
俺は今でも秋野さんが大事なんだ。  
「あの、さ、手をこっちへ出して。それで」  
必死にことばをつむいだ。エネルギーが今の衝撃でかなりもっていかれてしまった。  
秋野さんは側にいるけど、きっとキスはもらえない。  
俺が彼女を自由にしたら、秋野さんは俺の体を振り捨てて、あっさりドアへと走ってい  
くに違いない。  
「あんまり、力ががないんだ。俺、汚れてて気持ち悪いのわかるけど、助かるためだから、  
少しだけ、我慢してよ、ね」  
話している間にもとろけて意識がなくなりそうだった。  
秋野さんが、足を動かさないような不自由な態勢で、体をひねって俺の方に縛られてい  
る手を差し出した。  
それが、足に張りついている不気味でいやらしいものを刺激しないようにふるまっている  
ようで、一層辛かった。  
体を伸ばし、白くて細い秋野さんの指に、汚れて黒く見える触手を絡める。そのまま少  
しずつ体を移動させていくと、秋野さんの手がびくびくと緊張した感じを伝えて来た。  
体が減り過ぎているのか、疲れ切っているせいか、秋野さんに触れても秋野さんの感じ  
ていることがわからない。  
(そのほうがいいのかもかもしれない)  
もし、こんなぎりぎりのところで、『こんな気持ち悪いスライムと一緒にいたのか』な  
んて気持ちを秋野さんから感じ取ったら、正直なところ、体が持つ自信はなかった。  
ゆるゆると動いて手首のロープにたどりつき、その結び目に体を押し込んでいく。縄目  
に体を無理に裂かれていくみたいだ。体を保とうとする意識が、綱渡りのロープよりも頼  
りなく、真っ暗闇の感覚に揺れて引き伸ばされ、なおも引っ張られる。  
結び目が少しずつ緩む。そして、唐突に、締めつけてくるのが弱まった。ロープが解れ  
たのだ。  
でも、俺の体はもうつながりを戻せなかった。  
ロープがほぐれたところからとろけた体が、びた、びた、と細切れになって床に散って  
いく。その青黒いべったりとした塊は、まるで固まり始めた血のように感じた。  
片手が自由になった秋野さんが焦ったように自力でロープを外し出す。  
俺の意識がもったのはそこまでだった。  
びしょん。  
俺は秋野さんの手から床に滑り落ちた。全身を砕くような衝撃も、どこか遠いもののよ  
うだ。失い過ぎた体は、もう秋野さんの片手に乗るほどしか残っていない。  
(秋野さん)  
秋野さんが慌てたように立ち上がった。顔をしかめながら、急いで口のテープをはいで  
いる。  
(あきのさん)  
あれほど欲しかった秋野さんのキスだけど、きっともう間に合わない。  
第一、床に汚物のように広がっているスライムに、一体誰がキスできる？  
地球に落ちて五年と少し。  
秋野さんと出会って、幸せだったのか、不幸だったのか。  
でも、両親とは違って、俺は『密約』の相手を殺さずにすむし、助けることさえできた  
んだから、きっと幸せだったんだろう。  
秋野さんがドアの方を見た。あのまま振り返りもしないで駆け出して行くと確信できた。  
(ばいばい)  
俺はなだれ落ちてくる深い闇にすべてを委ねた。

『ヴラン！』  
 夜の向こうから、辛い悪夢が駆け寄ってくる。  
 『ヴラン！ ヴラーン！』  
 父を失い、母を失い、そうして一人、地球に落ちて、その結末が『密約』の相手に見捨てられて死んでいく最後なんて、できすぎていていやになる。  
 けれど、それも仕方ないのかもしれない。  
 そもそも、地球に落ちたときから、生きのびるべきではなかったのかもしれない。  
 俺の意識は灰色の空間に漂っている。体もなく、感覚もなく、ただただぐったりとした疲労感に意識の隅々まで食い尽くされて。  
 『ヴラン！』  
 声が呼ぶ。繰り返し呼ぶ。  
 あれはきっとどこか違う世界からの声なのだ。  
 俺が本来行くべきだった世界。  
 父母のいる、静かで凍りついた闇の宇宙。  
 (あれ?)  
 けれど、どうしたのだろう、いつもならその呼び声に続く、宇宙船の爆発も、飛び散る父の姿も泣き叫ぶ母の悲鳴もなかった。きりきりと胸をかきむしっていく悲痛な想いも襲ってこない。  
 ただ繰り返し、名前を呼ばれているだけ。  
 ずっと、ずっと。  
 (これが、死ぬってことだったんだろうか)  
 どこへ行くでもなく、どこへ還るでもなく、こうして永久に半分眠り半分目覚めたような意識のまま、たった一人でこの空間を浮かび漂うものだったのだろうか。  
 『ヴラン！』  
 ふと、その声がどこか、それもとてもし近いところで聞いたような気がして、俺は我に返った。  
 (声、だって?)  
 『ヴラン！』  
 声は夢でしか呼ばれたことのない名前を呼んでいる。引き裂かれて傷みに泣く夢でしか呼ばれるはずのない名前を。  
 それとも、エネルギーがないから遅れているだけで、これから、いつもの夢が始まるのだろうか。  
 俺の前に灰色の空間はぼかりと大きな口を開いた。  
 その中は真っ黒な、泥のように塗り込められた闇一色。  
 (あそこへ吸い込まれて、終わるのかな)  
 ぼんやりと思った矢先、突然、目の前の暗闇に噴水が吹き上がって、驚いた。  
 (...秋野、さん?)  
 きらきらと光を跳ねて輝く水、その水に両手を差し出して秋野さんが笑っている。  
 (どうして、こんなところに)  
 体の奥の深くて柔らかいところをとがった爪でわしづかみにされたみたいな気がして、俺は震えた。  
 秋野さんの姿は、噴水の水と戯れて、涙が出るほどきれいで、鮮やかだ。  
 (あの、水になれば)  
 そう思った瞬間、俺の意識は秋野さんに降りかかる噴水に吸い込まれた。  
 秋野さんは楽しそうに笑いながら、降ってくる水に両手を差し上げる  
 その唇からためらいもなく、呼ばれた名前がある。  
 『ヴラン！ ここよ』  
 秋野さんは噴水の水に呼びかけていた。水に、いや、噴水の水になった俺に。  
 俺は噴きあげられ、太陽の日差しに透かされ、光の粒になって、秋野さんの両手に、髪に、頬に散っていく。  
 (秋野さん、俺に気づいている)  
 それは、胸の内が締めつけられるほどの幸福感だった。  
 場面が変わった。  
 雨が降っている。  
 しとしと豊かに緑を生き返らせる雨。  
 今度は俺は、その雨と一緒に地面に降り落ちていく。山に村に、そして町に。  
 アスファルトに叩きつけられる前に白くて細い指に受け止められ、覚えのあるエネルギーを感じる。空中を旅してひんやりと冷えた体が、秋野さんの掌で転がされ、温められる。見上げる視界に、少年のように邪気ない笑顔がささやきかける。  
 『ヴラン！ おかえり』  
 また、場面が変わった。  
 俺は、溶けて地面を流れ、草の上を、森の中を走り抜けて川へたどりつき、くるくる舞う水に押し流されていく。川は寄り集まり、深く幅広くなって、山から平野へ、町を通り港を過ぎて、海へと注ぐ。  
 海は多くの命を育みながら青く深く広くなっていく。その海の中で、俺もまた、数知れぬ命の中をくぐり抜け、まぎれこみ、広がり、溶け入って行って、やがて俺は海そのものへと変わっていく。  
 その俺の体の中に、忘れることない優しい波動を持った秋野さんの体が、ゆっくりと深く入り込んで来る。  
 秋野さんは何の不思議も感じていないように、海の中で泳ぎ回りながら、水をすくい上げ、ほほ笑みうなずく。  
 『ヴラン！ そこにいるよね』  
 秋野さんが俺の体の中をゆっくりと泳ぐ。やがて力を抜き、俺にすべてを委ねてくれる。俺はその無限の信頼に心を震わせる。秋野さんを抱き締め、守り、無事に岸へと送り届けることを誓う。  
 数々の場面の中で、秋野さんの命は、いつも俺の側にあった。  
 そして、秋野さんは俺が居ることを知っていてくれている、とわかった。  
 きっと、俺がどんなに形を変えようとも。  
 秋野さん。  
 俺の『密約』者。

俺はあなたの側にいる。  
ずっと、この先も、ずっと、あなたを守るためにいる。  
地球の水という水に散らばり、やがて、あなたの唇に受け止められて、キスされ、飲み込まれることもあるだろう。そしていつか、あなたの体の中に育まれる海を、新しい命を守ることになるかも知れない。  
俺はそのときもやっぱり同じように誓うだろう、あなたのすべてを守り続ける、と。  
稲妻のような鋭くてはっきりした確信、何ものにも揺らがない力を、俺は自分の中に感じ取った。  
秋野さん。  
俺は、あなたへの『密約』を全うする。  
それがきっと、真実だ。

ふる、と微かな寒さに震えて、俺は我に返った。  
「ヴラン！ ヴラン！」  
小さな声が切羽詰まった響きを宿して繰り返し俺の名前を呼んでいる。  
夢でしか呼ばれない名前を。失ってしまった故郷の名前を。  
なのに、その名前はついに悪夢を呼び起こさなかった。  
その名前が呼び起こしたのは、秋野さんがいるこの世界の美しさ、秋野さんが生きていてくれるこの世界に、俺が居られる場所のすべての光景だった。  
「ヴラン！」  
「秋野さん…？」  
ささやき声を返すと、秋野さんが軽く息を飲んだ。  
「…近江！ 近江だよな？」  
感覚が少しずつ戻ってきた。  
いつの間にか俺は秋野さんの掌に抱き上げられ、息が触れるほど近くで秋野さんに名前を呼ばれている。  
「よかった、何にも答えなくなったから」  
秋野さんの声は滲んでいた。  
「もう、死んじゃったのかと思ったよ」  
大きな目がこぼれ落ちそうなほど潤んでいた。俺を支えている手も、不安そうに小刻みに震えている。  
「ヴラン、て、呼んだ？」  
俺はそっと尋ねた。夢のような気がした。夢であるはずの出来事のような気がした。大きな声を出してしまうと、一気に崩れさりそうな気がした。  
けれど、それは崩れなかった。  
「うん、呼んだ、何度も」  
秋野さんがうなずいた。  
「どう、して？」  
「それが」  
秋野さんは、ほんの少し悲しそうに笑った。  
「あなたのほんとの名前だから。でも、あたしが知ってるのは、近江、だから。ヴランて呼んでも心配だったよ。このまま、もう、近江はどこにもいなくなっちゃうんじゃないかって。そんなの、いやだって」  
また少し、ことばを切ってほほ笑んだ。  
いきなり、その細めて笑った秋野さんの目から、ぼろぼろと、涙がこぼれた。  
温かな柔らかな感触の水が俺の体の上に落ちてくる。その液体は、秋野さんのキスと同じぐらい、甘やかで豊かなエネルギーをたたえている。一滴落ちるごとに一滴分、二滴落ちれば二滴分、涙が重なるごとに俺の体に力が戻ってくるのがわかった。  
「あった、かいや」  
「え？」  
「秋野さんの、涙」  
「ばか」  
秋野さんはつぶやいた後、唇をへの字に曲げて、俺を胸元に抱き寄せ、そっと指でなでてくれた。  
「近江、助けに来てくれたんだ」  
「うん」  
俺は秋野さんの指が触れる部分から流れ込んでくる力にうっとりした。  
「こんなに、汚れて、こんなに小さくなって」  
「秋野さんは…」  
大切な人だから。  
とっておきの告白は、秋野さんの次の動きにどこかへ飛んでしまった。  
「冷たいね」  
ひどく小さな声でつぶやいた秋野さんは、ぐい、と片方の手で目元を擦った後、しっかりと俺を抱え上げて、すばやく直接キスしてくれたのだ。  
「待ってて。絶対助けてあげるから。しっかりするんだよ、近江」  
秋野さんは目をきらきらさせながら、言い放った。  
「今、外へ連れ出してあげるから。家へ連れ帰ってあげるから」  
(これは、現実、なのか？)  
俺は胸の中でつぶやき続けた。  
(それとも、あの悪夢に変わるまでの、都合のいい夢なのか？)  
夢じゃない、と見る見る活力の戻ってくる体が教えてくれた。  
(秋野さんが、俺を連れ帰ってくれる、家に)  
もう一度、秋野さんが約束をするように、そっと俺に顔を寄せた。温かな吐息が触れて、もっと温かな唇が触れる。無防備にさらしていた感覚すべてに衝撃が走って、俺は体を踉蹌めた。そして、その後は、もっと感覚が広がって、気力がよみがえってきた。  
「秋野、さん」  
「黙ってて、あたしに任せて」  
秋野さんは片目をつぶって見せて顔を上げた。俺の体を胸元にしっかりと抱えながら、倉庫のドアへ向かう。  
驚いたことに、ドアの鍵はかかっていた。  
あれほど嚴重に縛っていたし、秋野さんがひどく落ち込んでいたから、逃げるわけがないとでも思われていたのだろう。  
「まっすぐ、外に出るよ。昼間だから、かえって手だしできない」  
秋野さんはドアを出ると、きつとした顔で前を見据えて歩き始めた。廊下で石崎か氷川

に出くわしたら最後だっただろうけど、秋野さんの足取りは怯まなかった。  
途中、たくさんのパイプが壁際に並んでいるところがあって、そこではあの細いパイプの中を流れていた液体の臭いがした。  
無意識に俺の体が強ばったのを感じたのか、秋野さんが尋ねる。  
「どうしたの、近江？」  
「ここの廃液、ひどいよ」  
俺はつぶやいた。  
「原液だと確実に細胞が死ぬほど。薄めてても、体が痛かった」  
びくん、と秋野さんの指が緊張した。  
「……そんなところを、通って、来てくれたんだ？」  
秋野さんが小さくささやいた。  
「それで、こんなに、なったんだ？」  
もう一度、吐息が近づいて、さっきより長く、唇が当たった。  
「大丈夫だよ、もう大丈夫だからね」  
(大丈夫、もう大丈夫)  
なんだか心と、そのことをどこかで前に聞いたことがあるような気がした。  
正直なもので、ささやきとキスに体の緊張はすぐに緩んだ。  
別棟の通路を抜け、てっきり裏口から出て行くのだと思っていたら、秋野さんはことさら人の多そうなところを選び、表側の施設に向かって進んでいく。次第に増えてくる、何も知らない顔の従業員は、汚れた秋野さんを妙な顔で眺めてはいるが、あえて声をかけて来る者はいない。  
それをいいことに、秋野さんはずっと前からここにいたような、まるでここに勤めているアルバイトのような顔で、どんどん表玄関へ向かって歩いていった。  
(そうか、あの夢)  
その秋野さんに抱かれて運ばれながら、俺はふいにさっきの夢を思い出した。  
(大丈夫、もう大丈夫、って)  
噴水に笑いかけていた秋野さん。雨を受け止めて温めてくれた秋野さん。海で泳いで体を波に任せていた秋野さん。  
夢の秋野さんはいつもそうだったのだ、もう、大丈夫だよ、と。  
あなたの居場所はここにあるでしょう、と。

突然、妙な声が響いた。  
秋野さんが通り抜けて行く、表玄関に向かう直線の通路に交わっている廊下に、二人の男が棒を突き刺された人形みたくにぼかんとした顔で立ち竦んでいる。

一人は石崎、一人は氷川。  
石崎はあつけにとられた顔から見る見る顔を赤らめて憤怒の形相になった。

「氷川あ、てめええ」  
側の氷川を押さえた声で怒鳴りつけ始める。  
だが、氷川は、きっと、その声を聞いていなかったに違いない。  
氷川は笑っていた。秋野さんが堂々と、平気な顔で、自分達の前を通り抜けて行くのを見ながら、石崎に怒鳴りつけられながらこづかれながら、なんだか妙にふんわりとした顔で笑っていた。

何が秋野さんに聞こえたのだろう。  
それはきっと、石崎の怒鳴り声ではなかったはずだ、秋野さんは呼ばれたみたいで、まっすぐに氷川の方を向いたから。  
不思議で奇妙な一瞬が通り過ぎた。  
石崎の声も周囲のざわめきも、ふいにどこかへ消え去ったような、時が止まったような瞬間。

秋野さんが氷川に笑いかけた。にっこりと、鮮やかに。  
正義を誇るわけでも、自分の強さを見せつけるふうでもなく、ただ、当たり前の結果を手にいれただけのように。

その笑みを、氷川が受け止めた。  
まるで、一つの芝居があって、その舞台の上で約束された出会いのように。  
氷川はゆっくりと秋野さんに頭を下げて見せた。それから、どなり続けている石崎にもばか丁寧なお辞儀をして、くるりと向きを変え、石崎を残して一人、廊下を静かに歩み去って行った。

氷川の中で何かが起こって、何かが永久に変わったのだ。  
氷川はきっと、もう、ここへは帰らないだろう。

そんな気がした。  
『この命はあなたに生かされています』  
その氷川と秋野さんに重なるように、ふいに、はるか昔に聞いたような懐かしい声が、俺の体の中一杯に響いた。  
『この命はあなたに生かされています。だから、あなたの命を奪うことには決して使うことはありません。あなたの命を守るために、支えるために、育むために、そして、あなたの命につながるために、わたしはこれから生きていきます』

それは約束のことばだ。  
遠い故郷の星でさえ、もうおとぎばなしになってしまった、『密約』を交わすときに互いに誓い合うことば。『密約』を交わす相手に、そして、相手と自分を支える命すべてに誓うことば。

小さかった俺が覚えているはずもなかった、約束。  
氷川もまた、何かの約束を思い出したのだろうか。  
あるいは、命の底に流れている、聖なる約束のことばを。

(大丈夫、もう大丈夫)  
秋野さんはささやく。  
スライムの俺に。  
あるいはまた、水に還ってしまって、この地球の中を漂う俺に。  
秋野さんはいつも俺を見つけ、ささやいてくれる。  
あなたがそこにいることを知っている。  
あなたがそこで私を守っていてくれることを知っている。  
あなたがどれほど私を愛してくれているかを知っている。  
だから、私はいつもあなたを見つけ、あなたに笑いかけ、あなたを呼ぶ。

(大丈夫、もう大丈夫)  
ここが俺の居場所。  
秋野さんは、氷川が去って行ったのも気にしなかった。歩き続け、受付のおぼさんの不審そうな顔にしたたかな笑顔まで返して、南大路製紙の大きなガラスの自動ドアを出た。

すれ違うサラリーマンや業者の間を擦り抜け、表の正門を出たとたん、  
「走るからねっ、近江！」  
秋野さんはダッシュした。  
「落ちたりしないでよっ！」  
ぎゅっ、と強く抱き締められながら、どんどん跳ね上がる秋野さんの心臓の音を、俺は初めて何の不安もなく味わい続けた。

体が回復して、人間形態を保てるようになるまでに、結局一週間かかってしまった。  
初めの数日は、秋野さんの部屋の隅に洗面器を置いてもらい、そこに休ませてもらって、眠って目覚めては秋野さんにキスしてもらい、再び眠り、体を少しずつ戻していった。

ただ、追跡で多少無茶をしたせいか、上水道処理をしていない水なら何とか体に取り入れられることができるようになったのは収穫だった。

秋野さんの接触も、キスだけじゃなくて触れてもらえるだけでも、エネルギーを補充できることがわかって、後半はミネラルウォーターを取り込みながら、秋野さんにとどき体を触ってもらって回復した。

「全体量が少ないままだと、近江、子ども形態になるの？ 可愛いかもしれないなあ、見たいなあ」  
秋野さんは、俺がかなり元気になったと感じたあたりで、そんなふうにならなかつたが、とりあえず、子ども扱いはされるのはいやだったので無視した。  
それでも、大学に戻れるほどになるには、なおも数日、時間が必要だった。  
久しぶりの登校には、秋野さんが付き添ってくれた。  
「ほんとに無茶して」  
この数日聞き続けたことばを、秋野さんはまた繰り返して俺をにらんだ。  
「わかってんの、近江？」  
「無茶してんのは、秋野さんの方でしょう」  
俺は切り返した。

「あんな危ない仕事に関わるから」  
「だってさ」  
秋野さんは不満そうに唇をとがらせた。  
「やっぱりさ、近江のこととかいろいろ考えると、水や環境が汚れるのを放っておいちゃだめだと思って」  
「俺？」  
秋野さんの考えることはやっぱりよくわからない。  
俺が首をかしげると、秋野さんはこくと一つ、自分に確認するようにうなずいて、  
「だって、もしあんたに何かあったら、地球の水にまぎれるんだよね？」  
優しい心配そうな声で続けた。  
「あの工場の廃液だけでも、近江の体、めちゃくちゃになってた。ひどく辛そうで、痛そうだった。死ぬときに近江の体がどうなるのか、そこはよくわからないけど、あんまり汚れた水に飲み込まれていくのは、近江、いやだろうと思って」  
(俺のため、だったのか)  
胸の奥がぐっと何か熱いもので一杯になった。  
そうさ、きっと、この人は、俺がもし死んだとしたら、あの夢みたいに水という水に話しかけるに違いない、そこに俺がいるはずだと何のためらいもなく確信して。  
『元気にしてる？ あたしは、ここにいるからね、近江。大丈夫だよ、一人じゃないから、安心するんだよ』と。  
何だか泣きそうになって、俺は目を逸らせ、久しぶりに来たから、ざわざわした大学の雰囲気気に気をとられている、ふりをした。  
秋野さんは俺の動揺には気づかなかった。当然のことのように、  
「今はまだ、あんまりきれいな声じゃないから、今、死ぬような無茶しちゃ、だめだよ。これから、少しでも頑張るって、もしあんたが危なくなっても、地球にいるのが辛いようにするからね」  
「どっちだって、同じでしょ」  
秋野さんの一途さがうれしくて、その相手は俺の『密約者』なんだと胸がせつなくて、つい、俺は秋野さんを振り返って口走った。  
「秋野さんがいなくなれば、俺は生きていけない」  
がたがたっ、と後ろでいきなりすごい音が響いた。  
振り返ると村西が階段から転げ落ちている。  
「なんてこと、言いやがる」  
ひきつった顔でよろよろと立ち上がり、腰と頭をさすりながらぶつぶつ文句をいった。  
「ひさしぶりに出て来たかと思ったら、ちっとは回りの目っていうものを考えてくれよな。ここは学内だぞ、いちゃつきかかったら、アパートでやれ、目障りだ」  
人がどれほど心配したと思ってるんだ、いきなり保健室から消えやがって、え、近江、わかってんのかよ、と続けた後、村西は唐突に俺の腕を強くつかんだ。  
「人間、だよなあ」  
つぶやいて、奇妙な顔で俺を見上げる。  
「え？」  
「いや、何でもない」  
村西は肩をすくめて首を振った。  
「目の錯覚だ、そうさそうさ」  
自分を慰めるように口の中でもごもごいっている。  
保健室を脱出するときに後ろで聞こえた悲鳴の主は、ひょっとすると村西だったのかもしれない、と俺は思った。  
何と応じたものか、答えあぐねていると、村西の方はもうそれでよかつたらしく、ひょいどこからか分厚い封筒を取り出して秋野さんに渡した。  
「ほら、宮内から。写真は惜しかったが、そのほかの情報がずいぶん役に立ったそうさ。で、少し多めに入ってる」  
「サンキュ」  
秋野さんはにこにこ封筒を受け取った。  
あの南大路製紙の裏工場の仕組みを俺から聞き取り、それを宮内に流したのだ。  
「不思議がってたぞ、どこでどうして、おまえみたいな素人が、工場内の詳しい構造を調べ上げられたんだって」  
村西自身も不思議そうに、  
「写真の方は宮内が何とかするっていったけど。なんせ、あの別棟の建物の正体はお手柄だったからな。あんなところ、入り込めるか、普通？」  
「へへへ、企業秘密です、ね、近江」  
俺を見上げてくすくす笑う秋野さんはとっても無邪気でとっても可愛らしく見えて、俺はエネルギーに関係なく、その唇が欲しいと思ってしまってた。  
(ほんとうに、人間に毒されてるよな)  
「何だ？ 近江も関係あるのか？」  
「うふふん、そうさ、次もヨロシクって宮内くんに頼んでね」  
「秋野さん！」  
笑顔と同じくらい無邪気に恐ろしいことを秋野さんは言い放った。  
「おいおいおいおい」  
村西も顔をしかめる。  
「今回やばかったんじゃないかねえのか。それで、近江がひっくり返ったんじゃないのか」  
「だって」  
秋野さんは目を細めてにこにこした。  
「近江のためにもなるし。近江が元気で、不安にならなくなって、寝てるときに泣き出さなくなったら、あたしもううれしいし」  
「寝てるときに泣き出すう？」  
「秋野さんっ！」  
村西がとんきょうな声を上げて俺を見る。俺は顔に熱くなったのを隠そうと、秋野さんのをのぞき込んだ。その俺に、秋野さんが真面目な顔でささやきかける。  
「辛い夢、見なくなった、よね？」  
「！」  
どきどき鳴った胸がそのまま内側に向かって締めつけられる。心配そうな秋野さんの目が俺の心を包んでくれる。  
(ずっと……気にしてくれただ)   
ああ、どうしよう。  
俺は体がふわふわしてとろけそうな気がした。  
(俺、ほんとにこの人が好きだ)

「秋野さん、俺…」  
押さえ切れなくて、秋野さんの体を引き寄せてしまう。  
「また、助けてくれるでしょ？」  
秋野さんはにっこり笑って俺を見上げた。  
「おまえら、人の話聞いてねえな。だから、もう、あーあ、はいはい、悪かった、こういう状態のときに側にいる方がばかなんだろ、はいはい、わかった、わかりました」  
村西は肩をすくめて背中を向けた。  
「さっさとキスでも何でもしてくれ！」  
「じゃ、お言葉に甘えちゃいますう」  
秋野さんはふざけた口調でいいながら、それでも目一杯真剣な顔をして、俺の頭を引き寄せた。  
「ずっと一緒にいるからね、近江。もう、大丈夫だよ」  
唇が重なる。  
甘い、甘い、豊かなエネルギーで満たされたキス。  
俺はそのキスにこの世界からの『おかえり』を聞いた気がした。

おわり

## 密約

<http://p.booklog.jp/book/13499>

著者 : segakiyui

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/segakiyui/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/13499>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト